

京都や地域で学ぶ強みを生かす子どもの育成（2年次）

—京都や地域再発見につなげる「伝統と文化」に係る学習の構想—

今井 大介（京都市総合教育センター研究課 研究員）

昨年度の研究では、「京都に根ざす『伝統と文化』を体感し、関心を深めること」に焦点を当て、第3学年の国語科及び道徳、第6学年の社会科及び道徳の学習に地域素材を位置付け、それらの実践授業を通して、「伝統と文化」を大切にする教育活動の充実を図った。その結果、過去と現在のつながりを感じたり、地域のよさに気付いたりするなど、地域で学ぶ強みを生かそうとする子どもたちの姿が見られた。

今年度の研究では、「京都や地域で学ぶ強みを生かす子どもの育成（2年次）—京都や地域再発見につなげる『伝統と文化』に係る学習の構想—」のもと、第3学年では「京都にゆかりのある昔話」と「京ことば」を学習素材として、第6学年では「京都の歴史」「世界文化遺産」などを学習素材として、総合的な学習の時間に位置付け、実践授業に取り組んだ。実践授業では、子どもたちが京都や地域の「伝統と文化」について理解し、発信・交流し、振り返る過程を重視した。その結果、京都や地域の「伝統と文化」に対する子どもたちの理解や考えが深まった。

目 次

はじめに	1		
第1章 京都や地域で学ぶ強みを生かす 子どもの育成に向けて		第3章 京都再発見につなげる学習の実際 －「総合的な学習の時間」における事例－	
第1節 京都や地域で学ぶ強みを生かす		第1節 M小学校第3学年の取組	
(1) 京都や地域で学ぶ強み	1	(1) 「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」 の学習の全体構想	11
(2) 実践授業を通してみる, 京都や地域で 学ぶ強み	2	(2) 手だてと子どもたちの姿から	11
第2節 京都や地域で学ぶ強みを生かす 子どもとは	3	第2節 A小学校第6学年の取組	
		(1) 未来に伝えていきたい「京都や地域の魅力」 についての学習の全体構想	18
第2章 京都や地域を再発見するために		(2) 手だてと子どもたちの姿から	19
第1節 京都や地域再発見につなげる「伝統と 文化」に係る学習の構想に向けて	5	第4章 研究の成果と課題 －実践授業を通してみえてきたこと－	23
第2節 「伝統と文化」を軸にした学習	7		
		おわりに	28

<研究担当> 今井 大介 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立室町小学校
京都市立朱雀第四小学校

<研究協力員> 坂本 亜樹 (京都市立室町小学校教諭)
久保田 理友 (京都市立朱雀第四小学校教諭)
池井戸 綾子 (京都市立朱雀第四小学校教諭)

はじめに

昨年度、『伝統と文化』を大切にし、地域で学ぶ強みを生かす子どもの育成(1年次)-京都に根ざす『伝統と文化』を体感し、関心を深める学習プログラムの提示-』というテーマで研究に取り組んだ。

実践授業を行うに当たり、小学校学習指導要領をもとに「伝統と文化」に関する学習と、国語科、社会科、算数科、音楽科、図画工作科、家庭科、体育科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動との関わりを明らかにした。その上で、「伝統と文化」に関する学習が、決して特別な教育活動ではなく、日常の学習で意識して取り組むことが可能であることをまとめた(1)。また、実践授業では、子どもたちが京都にゆかりのある短歌と俳句を声に出して読んだり、「古典の日記念 京都市平安京創生館(以下、創生館)」での見学学習で、平安時代の様子や文化を体感したりできるようにした。その結果、M小学校の第3学年の子どもたちは、国語科の学習で、京都にゆかりのある短歌と俳句を声に出して読んだり、書き表したりしたことにより、その後の自主勉強において、自ら京都や地域を素材にした俳句をつくったり、京ことばを集めたりすることができるようになった。また、S小学校の第6学年の子どもたちは、社会科の歴史学習で、平安京の様子や文化を体感したことにより、ジュニア京都検定の最終問題の作文において、「私が体験した京都の文化」「身近な京の歴史」「京都の歴史を体験して」などのテーマで京都と自分との関わりについて記述することができるようになった。

このように、昨年度の研究を通して、子どもたちが想定以上に「伝統と文化」への関心をもつことができていた。昨年度の実践を振り返ると、指導者が「伝統と文化」を意識した授業を構想し、実践することで、子どもたちは授業以外の場面においても「伝統と文化」を意識したり、関心をもち続けたりすることができるということを実感した。

そこで、本年度は、研究テーマを「京都や地域で学ぶ強みを生かす子どもの育成(2年次)-京都や地域再発見につなげる『伝統と文化』に係る学習の構想-』とする。

本市「学校教育の重点」にも記載されており、本市は「歴史都市」「観光都市」など、多様な都市特性(2)をもっている。子どもたちが京都や地域の「伝統と文化」について理解し、更に発信・交流し、振り返ることで、新たな気付きや理解が

生まれると考え、本年度の研究テーマを設定した。

この研究を通して、一人でも多くの子どもが、①学習したことをもとにして京都や地域の「伝統と文化」に関することをさらに知りたいと関心を広めたり、②今まではあまり意識していなかったけれど、京都や地域にはたくさんの「文化」があると理解したり、③体感したことを発信・交流し、振り返ることで京都や地域を再発見したりすることにつながるよう、取組を検証し考察した上でその成果と課題を報告する。

(1) 今井大介「No.568 『伝統と文化』を大切にし、地域で学ぶ強みを生かす子どもの育成(1年次)-京都に根ざす『伝統と文化』を体感し、関心を深める学習プログラムの提示-』『平成25年度研究紀要』京都市教育委員会 京都市総合教育センター 2014.3 p.189

(2) 京都市教育委員会『平成26年度 学校教育の重点』2014.3 p.1

第1章 京都や地域で学ぶ強みを生かす 子どもの育成に向けて

第1節 京都や地域で学ぶ強みを生かす

(1) 京都や地域で学ぶ強み

本研究での京都及び地域のとらえは図1-1のとおりである。

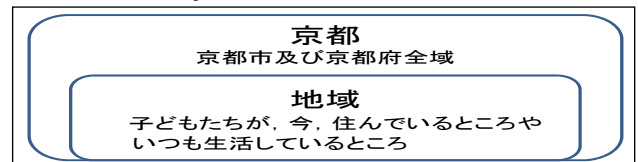


図1-1 京都及び地域のとらえ

子どもたちの視野や行動範囲は、いま、住んでいるところやいつも生活しているところから、京都市及び京都府へと徐々に広がっていくと考えられる。

ところで、「京都や地域で学ぶ強み」とは何か。794年から1868年まで日本の都であった京都には、長い間につくりあげ、守り、受け継いできた自然・町並み・寺社仏閣などが数多くある。17社寺・城が世界遺産に登録されるなど、その価値は世界で認められている。それらは日常的に人々の暮らしの中に溶け込んでいる。祇園祭や五山の送り火をはじめとする伝統行事も、身近なものとして感じることができる。他にも、京ことば、京料理など、様々な文化がある。このような学習素材となる環境に視点を当てて学習を進めていけば、子どもたちは京都に根ざす「伝統と文化」を体感したり、交流したりする機会を得ることができる。と考える。

また、京都市では、子どもたちが「伝統と文化」を体感したり、交流したりすることができる取組を、枠内の事業として実施している。

京都市の実施する「伝統文化体験事業」

- ・京都市立小学校6年生の子どもたちが、特別観覧席で時代祭を見学する事業
- ・児童生徒が本物の伝統産業製品に触れることを通して、京都の伝統産業に対する理解を深めるとともに、文化や伝統を尊重する態度を育成するため、伝統産業製品を制作する職人を小・中学校に派遣し、制作実習又は制作実演などを行う京の『匠』ふれあい事業（伝統産業職人による制作体験教室）

【平成25年度実績】

- ・実施小学校数：33校
- ・実施内容：西陣織、京鹿の子紋、京友禅・京小紋、京くみひも、京漆器、京焼・清水焼、扇子、京仏壇・京仏具、京房ひも・撫ひも、金属工芸品、京象嵌、京竹工芸品、京版画（3）

筆者は昨年度1月に、B小学校で行われた「京焼・清水焼」の「京の『匠』ふれあい事業」を見学した。枠内は、絵付けの体験をした子どもたちの感想である。

- ・清水焼の絵付け体験をして、絵付けぐらいなら簡単だろうと思っていたけれど、かなりグニャグニャになって難しいなと思いました。その絵付けをお茶わんがわれないようにうまくかく職人さんはすごいなと思いました。
- ・ぼくは京の「匠」を体験して、この仕事をしている人は、むずかしいことをしていることにおどろきました。ほかのお皿もみてみたいです。（下線は筆者によるもの）

感想から、子どもたちが実体験を通して、職人の熟練の技に気付いたり、驚いたりしていることがわかる。また、「京の『匠』ふれあい事業」をきっかけにして、子どもが「京焼・清水焼」のことをもっと知りたいというおもいをもっていることも推測できる。

枠内は、「京都や地域で学ぶ強み」を筆者が整理したものである。

ア 京都に根ざす「伝統と文化」が身近で、生活経験を生かすことができる

イ 京都に根ざす「伝統と文化」が身近にあることから、「すぐに」「数多くのものを」「繰り返し」見学したり、調べたりすることができる

ウ 京都に根ざす「伝統と文化」に関わる環境や取組を日頃から見たり聞いたりしていることから、体感することや交流することを通して、気付きや理解を深め、自ら関わろうとすることができる

以上のように、「京都や地域で学ぶ強み」は、環境及び取組の両面で、子どもたちが京都に根ざ

す「伝統と文化」を体感したり、交流したりする機会が多いことであると考える。

次項では、「京都や地域で学ぶ強み」を視点に、昨年度の実践授業にみる子どもたちの姿を明らかにする。

（2）実践授業を通してみる、京都や地域で学ぶ強み

先述のとおり、本市には、環境及び取組の両面で、子どもたちが京都に根ざす「伝統と文化」を体感したり、交流したりする機会が多くある。図1-2は、「京都や地域で学ぶ強み」を具体的に示したものである。

京都や地域で学ぶ強み

環境及び取組両面で、京都に根ざす「伝統と文化」を体感したり、交流したりする機会が多くある

つまり ➡ **学習素材が豊富**

図1-2 京都や地域で学ぶ強み

つまり、京都に根ざす「伝統と文化」に関する学習素材の豊富さ、各教科等の学習への位置付けやすさにつながるといえる。

図1-3は、図1-2に昨年度の実践授業を当てはめたものである。M小学校の第3学年の場合、国語科では「声に出して楽しむ」と道徳「動くはく物かん（時代祭）」の実践授業に取り組んだ。

国語科の実践では、図1-3 M小学校の第3学年の実践授業から京都にゆかりのある短歌と俳句づくりを体感したことで、実践授業後の自主勉強において、自ら、京都や地域を素材にした短歌や俳句をつくる子どもたちの姿がみられた。枠内は、短歌や俳句の一例である。

短歌

有名な お寺がいっぱい 古京都 かんこう客が
集まってくる

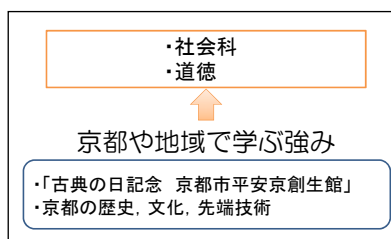
俳句

夏の夜 大文字山に 火がついた

これは「イ 京都に根ざす『伝統と文化』が身近にあることから、「すぐに」「数多くのものを」「繰り返し」見学したり、調べたりすることができる」事例だといえる。また、道徳の実践では、葵祭・時代祭・祇園祭が京都三大祭であることで、校区にある神社でも春に祭礼が行われていることを関連付けて想起することができた。後

日、研究協力員の先生から「実際に、祇園祭を見に行ったよ」と話す子どもの姿や「先生、冬にも校区にある神社で祭があるよ」と地域のことをうれしそうに話す子どもの姿がみられたと聞いた。これも、「ア 京都に根ざす『伝統と文化』が身近で生活経験を生かすことができる」「イ 京都に根ざす『伝統と文化』が身近にあることから、“すぐに”“数多くのものを”“繰り返し”見学したり、調べたりすることができる」事例だといえる。

また、S小学校の第6学年での昨年度の実践授業は、図1-4のように表すことができる。



S小学校の第6学年では、社会科「天皇中心の国づくり」「今に伝わる室町文化」と道徳「美しきふるさと京都」の実践

授業に取り組んだ。社会科の実践では創生館で見学学習を行ったり、道徳の実践では京都のことについて自分はどのように思っているのかを考えたりした。すると、実践授業後の社会科で、我が国の歴史を振り返りまとめる学習をしたとき、新聞やポスターなどの掲示物をつくって、下学年の子どもたちに伝えようとする子どもの姿が見られた。枠内は、子どもが新聞記事として書いた内容の一部である。

私たちが住んでいる京都は、平安時代にさかのぼると平安京だったのです。また、平安時代から江戸時代まで天皇がずっといました。こんな魅力的な京都に住んでいるのはとても幸運なのです。(下線は筆者によるもの)

更に、「伝統文化体験事業」を活用した学習で、時代祭の雰囲気や様子を体感したことから、「私も大学生になったら、時代祭の行列の中で歩いてみたい」と話す子どもがいたと聞いた。これは、京都や地域にある「伝統と文化」を体感することによって、将来、自分も時代祭に参画してみたいという意欲につながっている姿だといえる。また、「ウ 京都に根ざす『伝統と文化』に関わる環境や取組を日頃から見たり聞いたりしていることから、体感することや交流することを通して、気付きや理解を深め、自ら関わろうとすることができる」事例だともいえる。

研究協力員の先生からは、「教師が『伝統と文化』に視点を当てた授業を意識すると、子どもたちも意識するのですね」という言葉を聞くことができた。この言葉は、子どもたちだけではなく指

導者も、「京都や地域で学ぶ強み」を実感することができることを表しているものだといえる。

以下は、本節(1)(2)から、子どもたちにとっての、また、指導者にとっての「京都や地域で学ぶ強み」をまとめたものである。

子どもたちにとって

○京都に根ざす「伝統と文化」についての学習を容易に追究できる環境にあること

指導者にとって

○京都に根ざす「伝統と文化」の学習素材となる環境及び取組が数多くあること

次節では、「京都や地域で学ぶ強み」を各教科等に位置付けて実践していくことに加え、「京都や地域で学ぶ強みを生かす子ども」とは何かについて整理する。

第2節 京都や地域で学ぶ強みを生かす子どもとは

本市「学校教育の重点」には、「京都で学ぶ強みを生かす子ども」に関して次のような記載がある。

これまで各校で進めてきた伝統文化教育や環境教育、食育、自然体験活動等は、いずれも京都ならではの取組であり、本市教育の誇りでもある。「2020年東京オリンピック・パラリンピック」の開催が決定されるなど、世界から日本が注目されるなか、こうした取組を通して、本市の子どもが、京都・日本の伝統と文化の本質を感じとり、誇りを持って、国内外を問わず広く発信する力と態度を身に付けることを重視しながら、次代と自らの未来を切り拓く子どもを育成する。(下線は筆者によるもの)

下線部から、子どもたちが京都に根ざす「伝統と文化」を「広く発信する力と態度」を身に付けるためには、京都に根ざす「伝統と文化」に対する気付きや理解が不可欠である。このことから、本研究において目指していきたい京都や地域で学ぶ強みを生かす子ども像は次のとおりである。

○京都の「伝統と文化」の歴史的な意味や内容、それに携わってきた人のおもいや願いなどを理解できる子ども

○京都や地域を好きになったり、誇りに思ったりできる子ども

○京都や地域の「伝統と文化」を体感したり、発信・交流し、それを振り返ったりすることで、京都や地域の「伝統と文化」に対する理解や考えを深める子ども

先述のとおり、子どもたちの周りには、17社寺・城の世界遺産、伝統行事、伝統産業、京ことば、京料理など、京都に根ざす「伝統と文化」の手掛かりとなるものが多い。

次ページの①②③は、京都に根ざす「伝統と文化」を学習に位置付けるときの基礎的な視点であ

り、京都や地域で学ぶ強みを生かす子どもを育成するための手だてとして、大切にしていきたい。

＜①資料活用＞

京都は学習素材が豊富で、学習に役立つ貴重な資料が数多くある。京都に根ざす「伝統と文化」に関わって、写真、文書、地図、映像などの資料を子どもたちに提示したときには、情報を読み取り、その情報と現在との共通点や相違点に気付くことができるように指導が必要であると考えます。表1-1は、写真を活用したときの指導内容と、予想される子どもたちの反応である。

表1-1 写真を活用したときの指導内容例と予想される子どもの反応例

指導内容	予想される子どもの反応
どのような建物が写っているのだろう	○○寺の建物の様子は、昔も今も同じだね
人はどのような様子だろう	◇◇祭では、数多くの人が◆◆に乗っているね
建物や人の周りにはどのような様子だろう	□□をつくっている職人さんの周りには、道具は、現在とは形が違うね

写真で、不鮮明ではっきりしない部分がある場合には、文書資料を補うと、写真と文書などのように複数の資料を関連付けて読み取ることにつながる。子どもたちが資料を活用することは、読み取った情報から考えたり、表現したり、発信することにも生きて働くと考えます。

＜②施設の活用＞

京都や地域を「足でみる」視点はとても大切なことだと考える。歩くことによって、普段は気に留めていなかった「伝統と文化」に気付いたり、意外な発見があったりすることが考えられるからである。

本市には創生館をはじめ、「京都市歴史資料館」「京都市美術館」「京都市考古資料館」「琵琶湖疏水記念館」「京都市学校歴史博物館」「京都伝統産業ふれあい館」など、数多くの施設がある。京都に根ざす「伝統と文化」に視点を当てた学習を進めていく際には、単元計画にこれらの施設見学学習や調べ学習、施設で働く人から話を聞くなどを取り入れることが、子どもたちの気付きや理解を深める上で有効である。また、施設との連携により、子どもたちが繰り返し見学したり、調べたりすることにもつながる。更に、施設で作成したパンフレットやホームページなどの資料を活用できるように連携を図ることは、子どもたちの学びの広がりや深まりとともに、学校として新たな教材開発、授業外での子どもたちの自主的な学びにもつながると考える。

＜③学習形態の工夫＞

本市「学校教育の重点」の「『確かな学力』の育成に向けて」の項には、「問題解決的な学習や探究活動の充実」に関して次のような記載がある(5)。

伝統文化教育、環境教育、食育等の取組においても、学習指導要領の趣旨を踏まえ、それぞれの教育活動の目標やねらいを明確に定め、それぞれの教育活動の目標やねらいを明確に定め、体験活動や作業的活動、子ども同士が互いの意見を深め合う活動など、多様な学習形態を取り入れ、主体的に問題解決を図る学習を進める。
(下線は筆者によるもの)

下線で示した「子ども同士が互いの意見を深め合う活動」として考えられる学習形態は、例えば、カードを活用したKJ法で考えを類別したり、ウェビング法でイメージを広げて多面的にとらえたり細分化したりする方法、ペアでの話し合いなどが挙げられる。昨年度の実践授業では、子どもたちが体感し、学び合ったことを振り返って、短冊(国語科・道徳)やストーリーシート(社会科)に表出する(6)。それを板書に整理して子どもたちに提示する。つまり、指導者が学び合いを可視化することで、過去と現在のつながりをとらえることができるようにした。しかし、学級や学年内の学びを中心に行っていたので、「京都や地域で学ぶ強み」を実感する学びまでには至っていなかった。

そこで、今年度の研究の実践授業においては、次のステップとして、枠内のような発信・交流の場面を設定することを考えている。

- ・京都や地域の「伝統と文化」について体感したことを他学年の子どもたちに向けて、また他学年の学習と関連付くことを意図的に発信・交流する。
- ・京都や地域の「伝統と文化」について体感した2校以上の学校の子どもたちがいずれかの学校あるいは地域の施設に集い、各々が体感したことを発信・交流する。

他学年に発信したり、他校と互いに発信・交流したりする場面を設定することで、京都や地域に根ざす「伝統と文化」に対する子どもたちの見方・考え方の広がりや深まりが期待できると考える。

発信・交流の場面の詳細については、次章で述べる。

(3) 京都市教育委員会事務局「伝統文化体験事業」<http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000156754.html> 2015.3.3

(4) 前掲(2)p.1

(5) 前掲(2)p.4

(6) 前掲(1)p.20,24

第2章 京都や地域を再発見するために

第1節 京都や地域再発見につながる「伝統と文化」に係る学習の構想に向けて

<発見から再発見へ>

昨年度は、子どもたちが「伝統と文化」を大切にする態度を形成していく過程を次のように設定した。

- ①「文化」との出会いから、②「文化」をみる目をもち、③「文化」が「伝統」に支えられているということに気付き、④「伝統と文化」を大切にする態度を形成する。

これを受けて、本年度は、①②③を「発見」の過程とし、「再発見」への過程を加えることで、④「伝統と文化」を大切にする態度の形成をより確かなものにできると考えた。そこで、京都や地域再発見につながるために、「発見」から「再発見」への学習を構想し、実践していく。なお、「発見」及び「再発見」の定義は枠内のおりである。

発見

「文化」との出会いから、「文化」をみる目をもち、「文化」が「伝統」に支えられているということに気付くこと

再発見

「発見」したことを発信・交流し、振り返ることで、理解や考えを深めること

図2-1は、本年度の研究の構造を示したものである。図2-1のとおり、本年度、研究を進めるにあたって、特に重視している過程は「発見⇒発信・交流⇒振り返り⇒再発見」である。ここでは、特に、発信・交流の場面について述べる。

<発信・交流の場面>

どのように発信・交流の場面を設けると、子どもたちの学びが深まったり、「京都や地域を再発見する」ことにつながったりするのであろうか。

本研究での構想を以下に提示する。

【構想①】

京都や地域の「伝統と文化」について体感したことを他学年の子どもたちに向けて、また他学年の学習と関連付くことを意図して発信・交流する場面

【構想②】

京都や地域の「伝統と文化」について体感した2校以上の学校の子どもたちがいずれかの学校あるいは地域の施設に集い、各々が体感したことを発信・交流する場面

【構想①：他学年に発信・交流】

図2-2は、京都や地域の「伝統と文化」について体感したことを他学年の子どもたちに発信・交流する場面を構想したものである。

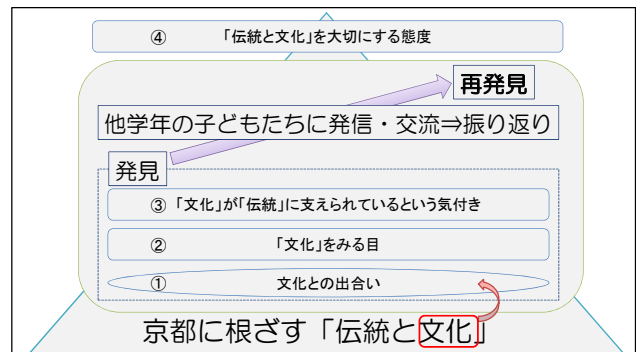


図2-2 他学年の子どもたちに発信・交流する場面の構想

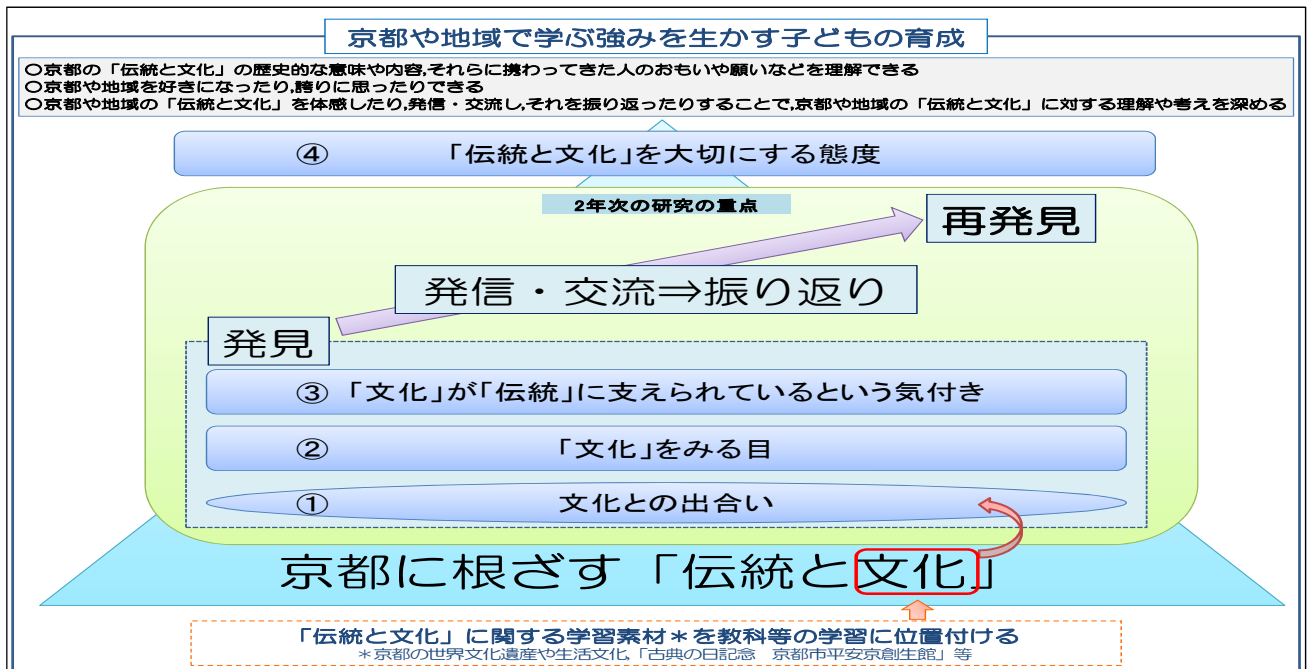


図2-1 本年度の研究の構造

発信する内容としては、例えば、第3学年の国語科(1月)に「単元：かるたについて知ろう(教材：かるた)」がある。そこでは「かるた」を読んでわかったことや考えたことなどを交流する学習活動がある。また、第1学年の生活科(1~2月)に「単元：きせつとあそぼうーふゆもげんきにー」がある。本単元では「お正月遊び」をしてみんな楽しく遊ぶ学習活動がある。

そこで、第3学年の子どもたちが「かるた」について体感したことを第1学年の子どもたちに発信し、お互いの理解や気付きを交流する場面を設けることが可能ではないかと考える。そうすることで、それぞれの子どもたちに期待できる学びは枠内のおりである。

期待できる学びの例(第3学年)

- ・「かるた」は、およそ400年前から今まで多くの人が楽しむ遊びとして続いてきていることを実感しました。「かるた」で遊ぶことはこれからも続いていくだろうと思います。なぜなら、私たちが大人になったときも「かるた」で遊ぶことがあると思うからです。

期待できる学びの例(第1学年)

- ・3年生の発表をきいて、私たちがお正月遊びとして遊んでいる「かるた」は、昔から続く遊びであることを知りました。

第3学年の子どもが第1学年の子どもに対して発信し、それに対して第1学年の子どもが第3学年の子どもに感想や気付きを伝えたりする学習活動は、単年度だけではなく、次年度以降も続けることのできる取組であると考えます。

【構想②：2校で互いに発信・交流】

図2-3は、京都や地域の「伝統と文化」について体感した2校以上の学校の子子どもたちが地域の施設に集い、それぞれが体感したことを互いに発信・交流する場面を構想したものである。

例えば、京都市・岡崎にある「京都伝統産業ふれあい館」において、伝統産業の技について体感した2校の学校の子子どもたちがどちらかの学校の体育館に集い、発信・交流することも可能であると考えます。そうすることで、2校の子子どもたちの期待できる学びは枠内のおりである。

2校の子どもの期待できる学びの例

- ・◇◇小学校と学習したこと発信・交流して、京都の伝統産業を元気にすることは、日本の伝統産業を元気にすることにつながることを学びました。私たちは京焼・清水焼について学習しましたが、◇◇小学校が学習していた西陣織についても興味がわいてきました。
- ・私たちは西陣織について学習しました。そして、〇〇小学校では京焼・清水焼について学習したということを知りました。学習したことを発信・交流したことで、西陣織も京焼・清水焼も時代を超えて受け継がれてきた伝統産業製品であり、それらは京都の伝統行事を支えていることを学ぶことができました。

このように、2校で互いに発信・交流する場面をもつことは「京都や地域再発見」につながる学びになると考える。本事例の場合、発信・交流のポイントとなる条件は枠内のおりである。

- 2校ともに「伝統産業」についての学習をしていること
- 2校ともに「京都伝統産業ふれあい館」での見学学習を行っていること
- 発信・交流の時期が合うこと

この事例は2校の場合であるが、条件を整えば2校以上でも発信・交流する場面を設けることが可能である。また、図2-3で示したように、地域の施設を活用して、そこに集い発信・交流することも可能だと考える。

また、図2-3で示した取組は、中学校ブロックでの小学校と小学校をつなぐこと、つまり、学習を通して「小・小連携」を実現するとともに「子どもの学びの広がり」と深まり」が期待できる取組になると考える。

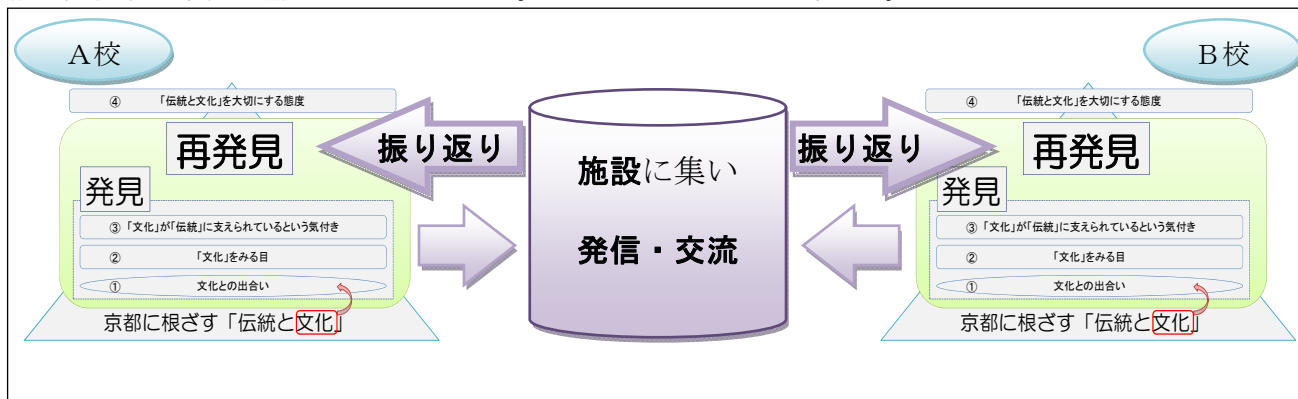


図2-3 2校で互いに発信・交流する場面の構想

第2節 「伝統と文化」を軸にした学習

昨年度、国語科や社会科、道徳の実践に取り組み、子どもたちの反応や学びを振り返る中で、各学年の各教科等に「伝統と文化」に視点を当てた取組の充実を図ることが大切であると感じた。それを受けて、今年度は、京都に根ざす「伝統と文化」に対する子どもたちの学びは、特定の学年だけではなく、段階的な積み重ねが必要だと考える。なぜなら、第1章で述べたとおり、子どもたちの視野や行動範囲は、いま、住んでいるところやいつも生活しているところから、京都市及び京都府へと徐々に広がっていくからである。

このことから「伝統と文化」を軸にした学習を考えたとき、表2-1に示したとおり、低学年では生活科、中学年・高学年では社会科及び総合的な学習の時間において、単元を構想し、実践していくことが有効ではないかと考える。

表2-1 「伝統と文化」を軸にした学習

学年	各教科等	理由
低学年	生活科	子どもたちが「身近な地域」について学ぶことができる。
中学年・高学年	社会科	「身近な地域→自分の住む市、府」というように、自分の身近なところから京都に根ざす「伝統と文化」を見つめていくことができる。
	総合的な学習の時間	地域の人々の暮らしや「伝統と文化」など、地域や学校の特色に応じた課題設定や学習内容を定めることができる。

そこで、本研究では、「伝統と文化」を軸にした学習として、低学年の生活科と中学年・高学年の総合的な学習の時間において、京都に根ざす「伝統と文化」に視点を当てた学習を以下のとおり構想した。なお、総合的な学習の時間については、京都に根ざす「伝統と文化」の授業を汎用性のあるものとして提示するという考えから、全20時間の構想を提案する。

<第1学年：生活科>

第1学年の生活科（上）に単元名「きせつとあそぼうーふゆもげんきにー」（全7時間）がある。

この単元の主な内容は、(5)季節の変化と生活(6)自然や物を使った遊び(8)生活や出来事の交流(9)自分の成長である。そして、本単元の目標は枠内のとおりである。

- ・冬の自然と触れ合い、自然の変化や不思議さを感じ取り、遊びや生活を楽しもうとする。
- ・季節の変化を自分たちの生活と関連付け、冬の自然を使って遊びを工夫し、遊んだことや遊びを通して楽しかったこと、気付いたことなどを表現することができる。
- ・冬の自然と触れ合い、楽しく遊びながら、季節の変化や遊びの楽しさ、自然の不思議さなどに気付くとともに、1年を通して自然と触れ合う遊びの楽しさや不思議さ、季節の変化と遊びや生活の変化を実感し、活動を通して、自分や友達のよさに気付く。(7)

「伝統と文化」の視点から、本研究では、伝承遊びを体感したり、地域の方から伝承遊びについての話を聞いたりしたことを通して、気付いたことや楽しかったことを「きせつとあそぼう『しゅんかしゅうとう』カード」に書き表すことを単元末に位置付ける。

図2-4は、「きせつとあそぼう『しゅんかしゅうとう』カード」のイメージである。

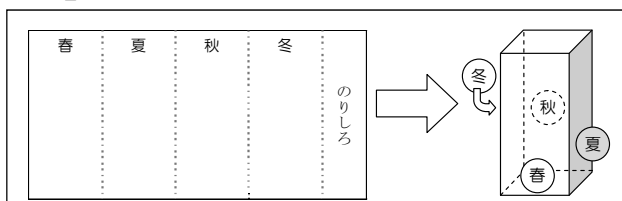


図2-4 「きせつとあそぼう『しゅんかしゅうとう』カード」

このカードは、四角柱の長方形の面に「春」「夏」「秋」「冬」ごとに学び、楽しかったことや気付いたことを書き表す形式になっている。このカードを校内や家庭で紹介することで、地域には伝承遊びを得意にしている人がいることや「かるた」「こま回し」「缶けり」などが伝承遊びであることを再確認することができるようにする。更に、家でもやってみよう、「ビー玉」や「紙風船」も伝承遊びだといった話題が出ることも期待できると考える。このように、子どもたちが学んだことを「きせつとあそぼう『しゅんかしゅうとう』カード」で、校内や家庭に向けて発信することで、「かるた」「けん玉」「こま回し」といった遊びが伝承遊びであることを、子ども同士や子どもと保護者が再発見するきっかけになると考える。

以上のことから、本単元を「京都や地域で学ぶ強みを生かす子どもの育成」の具現化につながる単元として設定する。次ページ表2-2は、本研究に

において構想した単元「きせつとあそぼう-ふゆもげんきに-」の主な学習活動を示したものである。

表2-2 「きせつとあそぼう-ふゆもげんきに-」の主な学習活動

過程	時	学習活動
発見・発信(交流)	1	○「きせつとあそぼう(はる)(なつ)(あき)」の学習で気付いたことを振り返る。
	2	○学校の「ふゆ」について見つけたことを交流する。 ○見つけた学校の「ふゆ」を「きづきカード(がっこうのふゆ)」に書きまとめる。
	3	○校区の「冬」を見つめる。 ○見つけた校区の「ふゆ」を「きづきカード(こうくのふゆ)」に書きまとめる。
	4	○「ふゆ」というきせつをよりのしくするにはどうすればよいかを話し合う。 ○ふゆの自然を生かした遊びや伝承遊びを考える。
	5	○学習の場を確かめ、「伝承遊び」を楽しむ。
	6	○『ふゆ』と遊ぶ(伝承遊び)の学習をして、気付いたことを「きづきカード(伝承遊び)」に書きまとめ、校内や地域に発信する。
振り返り・再発見	7	○単元「きせつとあそぼう」で学び、楽しかったことや気付いたことを「きせつとあそぼう『しゅんかしゅうとう』カード」にかき表す。【図2-4参照】 ※季節に合った遊びがあること、「けん玉」「こま回し」などの伝承遊びがあることを再発見する。

＜第2学年：生活科＞

第2学年の生活科(下)に単元名「まちをたんけん大はっけん-はるがいっぱい-」(全20時間)がある。この単元の主な内容は、(3)地域と生活(8)生活や出来事の交流(9)自分の成長である。そして、本単元の目標は枠内のとおりである。

- ・春の地域の自然や人々とその暮らしに関心をもつとともに、それらに親しみを持ち、自分の生活を広げようとする。
- ・町探検で地域の自然や人々、公共施設との関わりを広げるとともに、見つけたことや気付いたことを自分なりの方法でまとめたり表現したりすることができる。
- ・町探検を通して、町の施設やそこで働く人々に関心を持ち、それらと自分の生活との関わりに気付く。(8)

「伝統と文化」の視点から、本研究では、地域との関わりを一層重視し、子どもたちが地域の様々な場所との関わりに関心をもつことや、自分たちの地域に愛着をもつことができるようにするために、地域の人々及び地域の様々な場所などと直接関わる活動や体験を大切にする。そして、地域で学んだり気付いたりしたことを校内や保護者・地域に発信する場面を設けることで、他者からの反応に喜びを感じることができるようにする。図2-5は、「紙媒体」による発信方法をイメージしたものである。

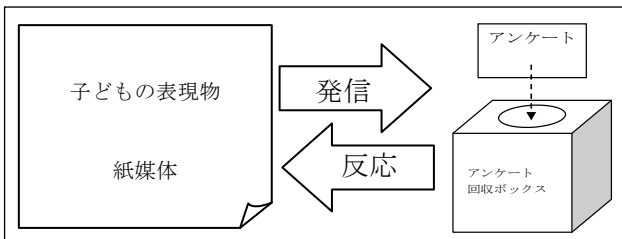


図2-5 「紙媒体」による発信方法

学習でお世話になった店や施設に子どもたちからの発信を紙媒体で掲示するとともに、アンケートとアンケート回収ボックスを設置する。子どもたちの気付きに対して、校内や保護者・地域からの肯定的な声が出るようにすることが、この発信方法の大きなねらいである。つまり、子どもたちの気付きを校内で発信することも一つであるが、地域にある公共施設で発信する場面を設けることも考えられる。地域にある公共施設との関わりをより実感することも期待できると考える。

以上のことから、本単元を「京都や地域で学ぶ強みを生かす子どもの育成」の具現化につながる単元として設定する。表2-3は、本研究において構想した単元「1 まちを たんけん 大はっけん -あきがいっぱい-」の主な学習活動を示したものである。

表2-3 「1 まちを たんけん 大はっけん -あきがいっぱい-」の主な学習活動

過程	時	学習活動
発見・発信・交流	1	○まちや学校で春見つけをして、吹き出しカードに書き表したり、話し合ったりする。 ○はるのまちのどのようなところが「すき」か、を吹き出しカードに書き表したり、話し合ったりする。
	2	
	3	○わたしたちのまちの「好きな場所」に行く計画を立てる。
	4	
	5~8	○好きな自然・場所・人を見つめながら、はるのまちを探検し、気付いたことを話し合う。
	9	○はるのまちをより詳しく知るために、行ってみたい場所が同じもの同士のグループに分かれて、探検する準備をする。
	10	
	11~13	○はるのまちをより詳しく知るために、行ってみたい場所が同じもの同士のグループで探検する。
	14~18	○探検を振り返り、聞いたことや調べたことを交流する。 ○探検して気付いたことをどのように発信するかを考え、まとめる。
	19	○まとめたことを友だちと交流したり、校内や地域に発信したりする。
振り返り・再発見	20	○単元の学習を通して、自分たちのまちについて気付いたことを振り返る。 ※地域の人々の働きや、地域には様々な場所があることを再発見する。

＜第3学年：総合的な学習の時間＞

第3学年においては、総合的な学習の時間に単元「京都や地域で伝え続けたい話やことば」(全20時間)を設け、「京都の言語文化」について学ぶ。本単元の目標は枠内のとおりである。

- ・「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」をきいたり、読んだり、自ら探したり、校内や地域に向けて発信したりすることを通して、京都や地域に対する親しみと愛着を高める。

昔話は数多くあるが、「浦島太郎」や「一寸法師」が、京都にゆかりのある昔話であることを知っている子どもは少ないのではないだろうか。

また、「おおきに（ありがとう）」「きばる（努力する）」「～はる（～なさる）」「おいでやす（いらっしやいませ）」「おはようさん（おはようございます）」などの「京ことば」についても、聞いたことはあるけれど、どのような意味なのかまでは知らない、何となく使っていたという子どももいるのではないかと考える。

そこで、子どもたちが「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について体感したことを他学年の子どもたちに発信することを通して、京都にゆかりのある「言語文化」を大切にすることを学ぶことができることを考え、本単元を構想した。表2-4は、本研究において構想した単元「京都や地域で伝え続けたい話やことば」の主な学習活動を示したものである。

表2-4 「京都や地域で伝え続けたい話やことば」の主な学習活動

過程	時	学習活動
発見・発信 (交流)	1	○「古典の日記念 京都市平安京創生館」の「平安京創生館『探検マップ』」から、「枕草子」と「源氏物語」に関心をもち、それらが平安時代のお話であることに気付く。
	2	○生活経験や既習事項から知っている昔話について話し合う。
	3～8	○「京都にゆかりのある昔話」を読み、お気に入りの作品を選び、面白かったところや気になった言葉について交流する。
	9 ・ 10	○「京ことば」には、どのようなものがあるのかを知る。
	11～14	○「京ことば」を調べ、集めたことを交流する。
振り返り・再発見	15～19	○「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について学んだことを、どのように広めるのかを考え、表現し、他学年に発信し、感想をもらう。
	20	○「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について学んだことを振り返る。 ※身近な場所のことが「京都にゆかりのある昔話」になっていることや、日常生活で何気なく使っている「京ことば」があることを再発見する。

<第4学年：総合的な学習の時間>

第4学年においては、総合的な学習の時間に単元「京都の伝統産業の魅力」（全20時間）を設け、京都の伝統産業について学ぶ。本単元の目標は枠内のとおりである。

- ・京都の伝統産業について理解し考えたことを、「京都の伝統産業の魅力」として校内や地域で発信・交流することを通して、京都や地域の「伝統と文化」に対する親しみと愛着を高める。

京都は平安時代から江戸時代までの長い間、都であり続けた。そのため、京都は長い歴史の中で独特の文化をつくり上げてきた。これを支えるために大きな役割を果たしたのが、京都の伝統産業である。しかし、「物」が豊かになっていく中で、京都に住む者であっても伝統産業製品にふれたり、

それを意識したりする機会が減ってきている。

そこで、本単元においては、京都の伝統産業を教材として取り扱う。京都の伝統産業について体感したことを、「京都の伝統産業の魅力」として他学年の子どもたちに発信したり、他校と交流したりする。このことから、今まで意識したことがなかったが、京都には大切にしていきたい伝統産業があることに気付いたり、京都の伝統産業を元気にすることと、日本の伝統産業を元気にすることのつながりを理解したりできるのではないかと考える。このように京都の伝統産業についての学びをきっかけにして、京都や地域の「伝統と文化」を大切にすることを学ぶことにつながると考え、本単元を構想した。表2-5は、本研究において構想した単元「京都の『伝統産業』の魅力」の主な学習活動を示したものである。

表2-5 「京都の伝統産業の魅力」の主な学習活動

過程	時	学習活動	
発見・発信・交流	1	○新聞記事「世界人気都市ランキング」と「観光客数の移り変わり」をグラフから読み取り、「観光客は、京都に何を見に来るのか」について、自分の考え（予想）を交流する。	
	2	○「古典の日記念 京都市平安京創生館」も京都ならではの施設であることを知る。 ○「貝合せ」や西陣織（持ち運びが可能なもの）といった実物に触れる。	
	3 ・ 4	○「伝統産業」とは何かについて調べ、確かめる。 ○伝統的な行事に使われている「伝統産業製品」について知る。	
	5	○現在、京都の伝統産業製品は、全部で73あり、その内の17の伝統産業製品が伝統的工芸品として国から指定されていることを知る。	
	6～10	○「京扇子」を見て気が付いたことを交流し、できあがりまでを予想し、交流する。	
	11～13	○京扇子が完成するまでの工程を知る。	
	14 ・ 15	○京扇子をつくっておられる職人さんの話やグラフから、「伝統産業製品」が直面している問題に気付く。	
	16～19	○茶道や落語、狂言、舞、結婚式といった伝統的な行事やお祝い事を支えている京扇子を未来に残していくためには、誰がどうすればよいのかを考え、表現し、他学年に発信したり、西陣織、京友禅などについて学習している学校と交流したりする。	
	振り返り・再発見	20	○京扇子をはじめ、京都の伝統産業について学んだことを振り返る。 ※京都には大切にしていきたい伝統産業が数多くあり、京都の伝統産業を元気にすることと、日本の伝統産業を元気にすることのつながりを再発見する。

<第5学年：総合的な学習の時間>

第5学年においては、総合的な学習の時間に単元「『平安京』からはじまる京都」（全20時間）を設け、「京都や地域の歴史、特に『平安京』」について学ぶ。本単元の目標は枠内のとおりである。

- ・「平安京」について理解し考えたことを、「『平安京』からはじまる京都」として校内や地域で発信・交流することを通して、京都や地域の「伝統と文化」に対する親しみと愛着を高める。

子どもは「『平安京』とは何か」を問われたとき、「794年に京都につくられた都」とこたえるこ

とはできるだろう。しかし、「平安京」が東西4.5キロメートル、南北5.2キロメートルのほぼ正方形であったことや、「平安京」の中の「平安宮」に天皇が住んでいたことなどを知っている子どもは少ないのではないだろうか。

そこで、京都や地域の歴史を学ぶこと、特に「平安京」について体感したことを他学年の子どもたちに発信したり、社会科で歴史を学習している第6学年や地域の方と交流したりすることを通して、「平安京」と現在が繋がっていることを語り継ぐ子どもたちを育むことができると考え、本単元を構想した。表2-6は、本研究において構想した単元『平安京』からはじまる京都』の主な学習活動を示したものである。

表2-6 「『平安京』からはじまる京都』の主な学習活動

過程	時	学習活動
発見 ・ 発信 ・ 交流	1 ・ 2	○「古典の日記念 京都市平安京創生館」の「平安京創生館『探検マップ』」に記載されている言葉『平安京』からはじまる京都から、「平安京」はどの辺りにつくられたのかを予想する。 ○「平安京」についての疑問や知りたいことについて話し合う。
	3~11	○「平安京」についての疑問やさらに知りたいことについて調べ、「平安京イメージマップ」にまとめる。
	12~15	○「平安京」と現在のつながりについて調べ、表現する。
	16~19	○テーマ『平安京』からはじまる京都』のもと、「平安京」と現在のつながりについて体感したことを他学年に発信したり、第6学年や地域の方と交流したりする。
振り返り ・ 再発見	20	○『平安京』からはじまる京都』について学んだことを振り返る。 ※794年に都がつくられた歴史ある京都に自分たちが住んでいることや、平安京から現在まで長い間引き継がれているものが数多くあることを再発見する。

<第6学年：総合的な学習の時間>

第6学年においては、総合的な学習の時間に単元「京都や地域の魅力を『未来へ』」（全20時間）を設け、「京都の歴史」「世界文化遺産」などについて学ぶ。本単元の目標は枠内のおりである。

- ・「京都の歴史」「世界文化遺産」などについて学び考えたことを、未来へと残していきたい京都や地域の魅力として校内や地域に向けて発信したり、他校と発信・交流したりすることを通して、更に京都や地域の「伝統と文化」に対する理解を深める。

本市「学校教育の重点」にも記載されており、本市は「歴史都市」「観光都市」「国際都市」等、多様な都市特性をもっており、日本の伝統・文化を日本はもとより世界に発信していく使命を担う都市でもある(9)。しかし、今後、実際に子どもたちが本市の多様な「伝統と文化」を広く発信していくためには、発信するという経験知の積み

重ねが必要であると考え。

そこで、本単元では、「京都の歴史」「世界文化遺産」などについて体感したことを、未来へ残していきたい京都や地域の魅力として、他校の子どもたちと互いに発信・交流する。本単元で学んだことを他校の子どもたちと互いに発信・交流することで、子どもたちの中に「伝統と文化」についての新たな気付きが生まれ、更に、「伝統と文化」についての理解や考えを深めることができると考える。そして、理解や考えの深まりが京都や地域の「伝統と文化」を大切にしていこうとする態度の形成につながると考え、本単元を構想した。表2-7は、本研究において構想した単元「京都や地域の魅力を『未来へ』」の主な学習活動を示したものである。

表2-7 「京都や地域の魅力を『未来へ』」の主な学習活動

過程	時	学習活動
発見	1	○「学習に活用できる『平安京創生館』」を見て、「古典の日記念 京都市平安京創生館」を見学したときのことを振り返る。 ○国宝「洛中洛外図屏風(上杉本)」の写真資料を観察し、その中から、京都の伝統として、今後も大切にしていきたいものを選ぶ。
	2~4	○京都の魅力について考え、交流する。
	5 ・ 6	○京都は「歴史都市」という都市特性をもっている事実から、京都の歴史年表を見て、気がついたことをまとめる。 ○「京都で伝統としてつながっているもの、また2020年に『京都や地域の魅力』を探して、その意味を追究していこう。」というめあてを知る。
	7~15	○未来に伝えていきたい「京都や地域の魅力」を追究し、それを整理・分析して、まとめる。
発信 ・ 交流	16~19	○他校とともに施設に集い、『未来へ』残していきたい『京都や地域の魅力』を互いに発信・交流する。
振り返り ・ 再発見	20	○他校と発信・交流し、学んだことを振り返る。 ※京都では、歴史だけではなく、伝統産業、年中行事など、数多くの脈々と受け継がれ、それらが現代、そして未来へとつながっていることを再発見する。

以上のように、第1学年から第6学年で「伝統と文化」を軸にした学習は、「伝統と文化」に対する子どもたちの理解や考えを深め、大切にできる態度につながると考える。

なお、本構想の試案及び実践事例については、京都市総合教育センターホームページを参照されたい。

第3章においては、「伝統と文化」を軸にした取組の実践について述べる。

(7) 京都市教育委員会「小学校指導計画生活科」2011.4 p.32

(8) 前掲(7)p.50

(9) 前掲(2)p.1

第3章 京都再発見につなげる学習の実際 －「総合的な学習の時間」における事例－

第1節 M小学校第3学年の取組

(1)「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」の学習の全体構想

M小学校では、全17時間設定で単元「京都や地域で伝えたい昔話や京ことば」に取り組んだ。

本単元の目標は『「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について体感したことを、他学年に発信することを通して、『京都にゆかりのある昔話』や『京ことば』に対する理解や考えを深めること』である。また、本単元の評価規準については次のように設定した。

【関心・意欲・態度】
○「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について関心をもち、自ら追究していく課題を決定している。
○「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について学んだことから、京都や地域の一員としての自覚をもつとともに、京都の「言語文化」を大切にしようとしている。
【思考・判断・表現】
○「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について体感したこと（本単元では特に、きいたり、読んだり、触れたり、感じたり、親しんだりしたこと）をわかりやすく表現している。
【技能】
○「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について、読み聞かせを聞いたり自分で読んだり、図書資料を活用したり、聞き取り調査をしたりして、必要な情報を集めている。
【知識・理解】
○京都の「言語文化」に触れ、話の面白さや独特の語り口調、言い回しなどに気付き、親しんでいる。

本単元（全17時間）の主な学習活動は表3-1のとおりである。

表3-1 「京都や地域で伝えたい昔話や京ことば」の主な学習活動（全17時間）

過程	時	学習活動
発見	1	○「古典の日記念 京都市平安京創生館」の「平安京創生館『探検マップ』」から、「枕草子」と「源氏物語」に関心をもち、それらが平安時代のお話であることに気付く。
		○生活経験や既習事項から知っている昔話について話し合う。
	3～5	○「京都にゆかりのある昔話」を読み、お気に入りの作品を選び、面白かったところや気になった言葉について交流する。
		6
発信 (交流)	7～14	○さらに、「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について調べ、まとめる。
		○「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について学んだことを、どのように広めるのかを考え、表現し、他学年に発信し、感想をもらう。
振り返り ・ 再発見	15 ・ 16 ・ 17	○「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」について学んだことを振り返る。 ※「京都にゆかりのある昔話」に出てくるところが身近な場所であることや、日常生活で何気なく使っている「京ことば」があることを再発見する。

国語科の学習指導要領解説では、「言語文化」に関する事項について、次のように示されている。

〔言語文化と国語の特質に関する事項〕を設け、我が国の言語文化に親しむ態度を育てたり、国語の役割や特質についての理解を深めたり、豊かな言語感覚を養ったりするための内容を示す。(10)

昔から日本に伝わる日本語の特質を知り、現在とのつながりを考えながら、豊かな日本語の継承につなげていくとともに、豊かな日本語の担い手を育てることが、この事項のねらいだといえる。

このことを踏まえながら、「京都の『言語文化』」、特に「京都にゆかりのある昔話」と「京ことば」を学習素材として、総合的な学習の時間に位置付け、単元「京都や地域で伝えたい昔話や京ことば」を構想し、実践した。これは、子どもたちが、学習で理解したことや考えたことをもとにして、京都市立図書館や学校の図書室で「京都にゆかりのある昔話」を探して読んでみよう、「京ことば」を使ってみようなどと意欲を高めることを意図した単元である。


(2) 手だてと子どもたちの姿から

ここでは、総合的な学習の時間「京都や地域で伝えたい昔話や京ことば」での手だてと子どもたちの姿について述べる。

<発見の場面>

◇京都にゆかりのある昔話と出会う

M小学校の校区には「平安京」とゆかりのある上御霊神社がある。子どもたちを「平安京」へ誘うことを意図して、そして「枕草子」と「源氏物語」は平安時代の都、つまり、現在の京都でつくられたものであることに子どもたちが気付くことを期待し、ここでは、創生館の「平安京創生館『探検マップ』」を資料として示した。図3-1は、子どもたちが「平安京創生館『探検マップ』」を見ている姿と、そのときのつぶやきである。



- ・平安京や。
- ・えっ、京都市なん。
- ・鴨川があった。
- ・全体が平安京やったんや。

図3-1 資料を見ている子どもたちの姿とつぶやき

更に、図3-2で示す資料を提示しながら、「まんがで古典に親しむコーナー」に着目させることで、源氏物語や枕草子に子どもたちの関心が向くように働きかけ、その後の学習活動である昔話との出会いにつながるようにした。



図3-2 子どもたちに提示した資料

その後、「枕草子『春はあけぼの』」「源氏物語『桐壺』」を教材文として配布した。それらが手元に来ると図3-3のように「春はあけぼのやうやう～」「いづれの御時にか～」と進んで教材文を読む子どもたちの姿が見られた。



図3-3 進んで教材文を読む子どもたちの姿



図3-4 教材文を声に出して読む姿は枠内のような感想が出た。

- ・読みにくい。
- ・何のことが書いてあるんやろ。
- ・意味がわからない。
- ・「いとやむごと」って何やろう。

そこで、指導者が「高学年や中学校の国語科で詳しく勉強します。だから、そのときに、今日の学習を少しでも思い出してくれたらうれしいです」と声をかけると、子どもの表情も少し和らいだ。そして、「枕草子『春はあけぼの』」と「源氏物語『桐壺』」の解釈文を提示すると、「何か聞いたことある」と子どもたちが自分の経験と重ねた発言や「もう一度、源氏物語が読みたい」という前向きな発言を聞くことができ

た。更に、指導者が『枕草子』と『源氏物語』は、いつの時代のものだろう」と問いかけると、「確かに気になる」と、どの時代のものかについて関心を示す子どもの姿も見られた。そこで子どもたちに提示したものが、図3-5のワークシートである。

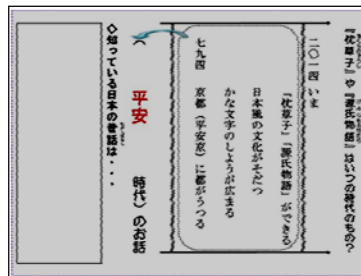


図3-5 ワークシート

これを見ながら『枕草子』と『源氏物語』は、平安時代のものです。つまり、昔のお話ということですね」と指導者が確認すると、「やっぱり」といった反応や「平安京創生館『探検マップ』」を振り返りながら、「ここに京都平安京って答えが書いてある」とうれしそうに発言する子どもの姿が見られた。

この後、「みなさんが知っている日本の昔話は何ですか」という指導者の問いかけに対する子どもたちの発言は枠内のおりである。

- ・日本の昔話って何だろう。
- ・かめを助けて乗る話って何やったかな。
- ・どれが日本のものかわからない。

特に、「どれが日本の昔話かわからない」といった発言は想定されるものであったので、あらかじめ用意していた第1学年国語科の単元「むかしばなしがいっぱい」の挿絵を提示した。すると、「したきりすずめや」「花さかじいさんも日本の昔話やね」などと生活経験や既習事項を想起する子どもの姿が見られた。図3-6は、第1学年国語科の単元「むかしばなしがいっぱい」の挿絵を見たり、自分が知っている日本の昔話をワークシートに書き出したりしている子どもたちの様子である。



図3-6 子どもたちの様子

子どもたちが発表した日本の昔話は次ページ枠内のおりである。

金太郎	花さかじいさん	ねずみのすもう力太郎
ぶんぶくちやがま	桃太郎	かちかち山
三まいのおふだ	雪女	おむすびころりん
かっぱの雨ごい	つるのおんがえし	竹取物語(かぐやひめ)
さるかに合戦	一休さん	したきりすずめ
かさじぞう		

この後、指導者が「京都にゆかりのある昔話」として、題名を明かさずに「一寸法師」を読んだ。すると、子どもからは「あっ。一寸法師や」「一寸法師は京都の昔話なのだね」といった驚きや「関西弁みたいな言葉があった」と第6時以降の「京ことば」の学びにつながる発言があった。更に、第2時に教材文として配布する「きつね坂(キツネ坂)」「一休さんのとんち」「かえるをのみこんだ」ととさん」「おさるのしりはなぜあかい」の題名のみを紹介すると、「どんな話なんだろう」「早く読んでみたい」と興味をもつ子どもたちもいた。

◇京都にゆかりのある昔話に親しむ

前述の教材文五種類を配布し、子どもたちが自分のペースで読み進めることができるようにした。

図3-7は、「かえるをのみこんだ」ととさん」の一部である。



図3-7 「かえるをのみこんだ」ととさん」の一部

教材文については、京都市立図書館や京都市総合教育センター内のカリキュラム開発支援センターなどに所蔵されている図書を参考にして筆者が資料化し、それを子どもたちに提示した。教材文として不適切だと思われる言葉や文章については、意図的に書き換えたり、省略したりした。更に、子どもたちが、昔話の場面を想像しながら読むことができるように、教材文に挿絵を載せないようにした。

右上の図3-8は、「きつね坂(キツネ坂)」「かえるをのみこんだ」ととさん」を読み、それらの感想を記録しているワークシートである。

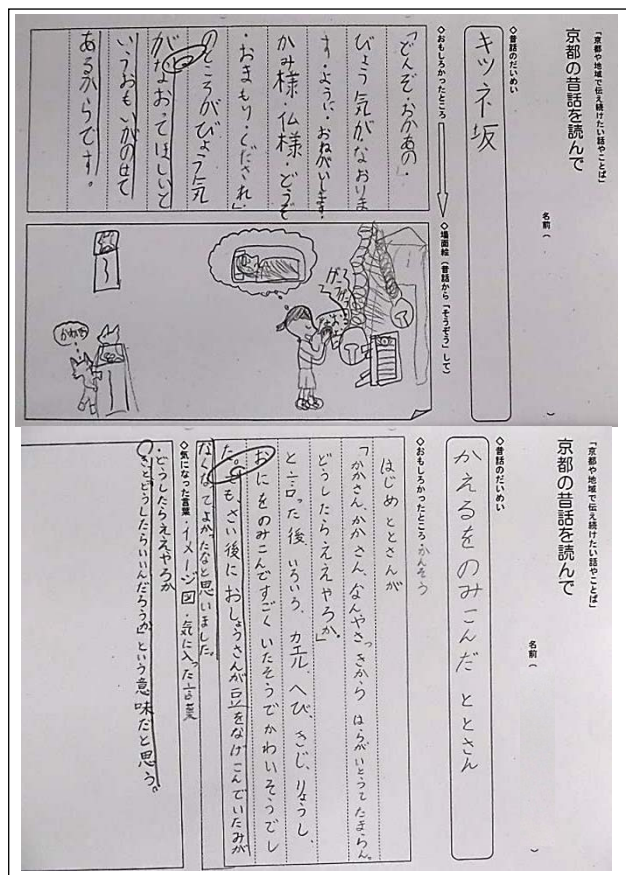


図3-8 昔話の感想を記録したワークシート

図3-8のように、二種類のワークシートを用意し、子どもたちが面白いと感じたことを「文のみで表現する」「文と絵で表現する」のいずれかを選択できるようにした。

更に、「きつね坂(キツネ坂)」を読み進める中で、それに出てくる地名を京都市の地図を使って確かめようとする子どもの姿(図3-9)が見られた。研究協力員の先生と打合せをし、本単元の学習が始まる前から、京都市の地図(社会科副読本「わたしたちの京都3・4年上」)を教室の側面に掲示していた。このことが、進んで地図を活用しようとする子どもの姿につながったといえる。



図3-9 松ヶ崎とキツネ坂の位置を確かめている様子

◇「京ことば」に触れる

子どもが「京ことば」を意識することができるように、指導者が板書する言葉を教材文の中から

れ(◇)と子どもたちの反応(C)をまとめたものである。

◇北海道・沖縄県の方言で語られている「ももたろう」を聴く。
 C:なんか発音がちがう。
 ◇「京ことば」で語られている「ももたろう」を聴いて
 C:何かこれが普通に感じるね。
 ◇指導者が「『京ことば』で語られている『ももたろう』の中には、みんなが聞き慣れた言葉もあったようだね」と切り返し、「京ことば」の発音を収録したCDから、「京ことば」を聴く。
 ①「あかしまへん」を聴いて
 C:ああ。言わはる。言わはる。
 ②「あこぎ」を聴いて
 C:悪いってことか。
 (略)
 C:最初、意味がわからない京ことばもあった。
 ◇指導者が「わからないことがあるからこそ、勉強していく意味がありますね」と切り返す。
 C:京ことばと京都の昔話、両方とも調べていきたい。

上記の子どもたちの反応を受けて、京都の昔話と京ことばについて追究していくグループ(3グループ)、京ことばについて追究していくグループ(3グループ)、京都の昔話について追究していくグループ(7グループ)を編成した。

また、調べる方法(本、資料、インタビューなど)と発表する方法(京ことばを使った標語・短歌や俳句、新聞、ポスターなど)を指導者と子どもたちと共に考えたり、「情報収集→整理分析→まとめ・表現」の過程を確かめたりすることで、学習の見通しをもつことができるようにした。

◇「京都にゆかりのある昔話」「京ことば」を収集・整理し、まとめる

ここでの、指導者の手だてや子どもたちの様子を五つ挙げる。

一つめは、意図のある常設掲示である。第1時に提示していた浦島太郎に関する新聞記事を教室の側面に掲示し続けていた。すると、図3-13のとおり、進んで「浦島太郎に関する新聞記事」



図3-13 新聞記事を読む様子

を手に取り、読み進める子どもの姿が見られた。

子どもたちに情報を収集させるために、意図的な常設掲示物は有効な手だてだといえる。

二つめは、学校図書館活用である。図3-14は、「京都にゆかりのある昔話」の中から、京都市にゆかりのある昔話に焦点を絞って、選び出しているグループの様子である。

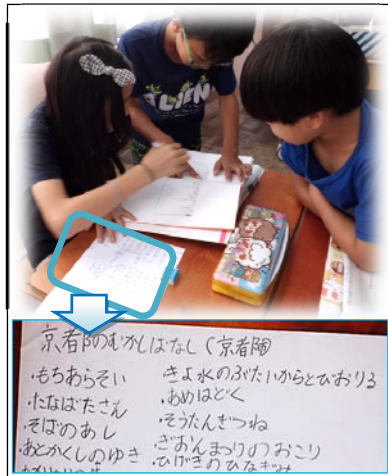


図3-14 京都市にゆかりのある昔話を選び出している様子

このときに活用していた資料は、M小学校の図書室に所蔵されていたものである。そのことを子どもたちに伝え、「図書室にも京都の昔話があったことに気付いていなかった」と驚いていた。

学校図書館を活用することで、身近なところに課題解決のヒントがあることに気付くきっかけになるといえる。

三つめは、教科横断の観点から他教科のものが使えることに気付かせることである。図3-15は、地図資料を用いたまとめ及び指導者の支援である。

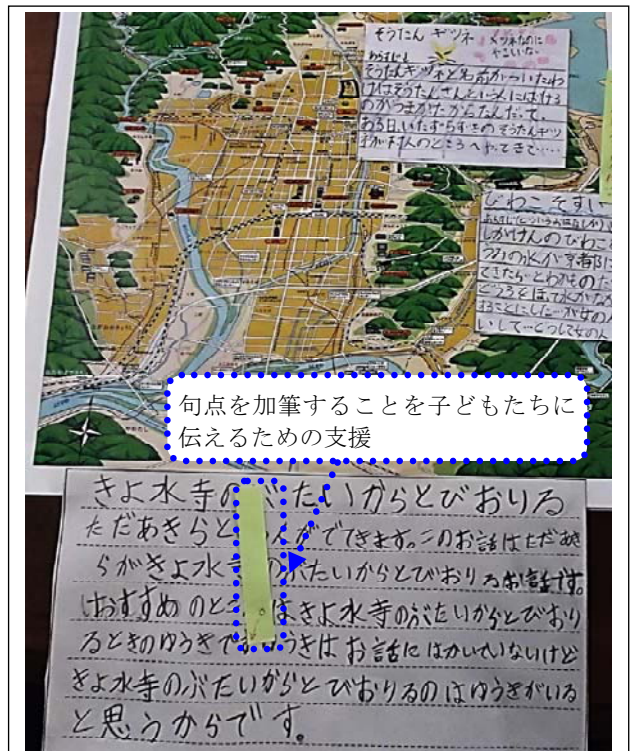


図3-15 地図資料を用いたまとめ及び指導者の支援

図3-15のとおり、「社会科の学習で使う地図資料」を調べやまとめに用いることは、学習を深められることに気付かせるきっかけとなった。なお、「指導に生かす評価」という視点から、グループ

ごとにまとめたものに、付箋を利用して助言をしたり、修正箇所を伝えたりした。

四つめは、他のグループの学びを参考にさせることである。



図3-16 グループごとにまとめたものを板書に提示したときの様子

図3-16のとおり、他のグループの学びを板書に示すと、子どもたちからは「クイズがあると、1年生や中学生が読んでみようという気持ちになるかな」「地図に表すと、どの場所の昔話なのかがわかるね」といったつぶやきを聞くことができた。地図を活用することのよさに気付いた子どもたちのグループは、当初、学習したことをポスターにまとめる予定であったが、他のグループのまとめのよさを自分たちのグループのまとめに生かし、最終的には、ポスターと地図にまとめるという姿が見られた。

五つめは、指導者が学習に役に立つ資料を作成し、提示することである。

本実践では、京都市立図書館や京都市総合教育センター内のカリキュラム開発支援センターなどに所蔵されている図書を参考にして、「京ことば事例集」を作成し、子どもたちに提示した。図3-17は、「京ことば」とその意味を調べている子どもの様子である。

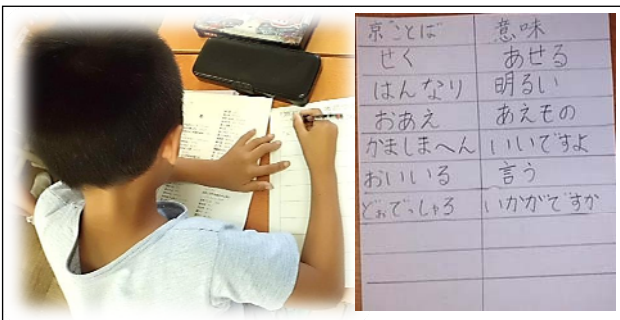


図3-17 「京ことば」とその意味を調べている様子

「京ことば事例集」をもとに、「京ことば」について調べることで、「家で、かましへんの意味をインタビューしたときも『いいですよ』だと聞いたわ」と保護者から聞き取っていたことと「京ことば事例集」を関連付けて、表にまとめる姿が

見られた。また、「京ことばは面白い」と楽しみながら学習する姿も見られた。

◇他学年に発信する前に、個の学びを振り返る

グループごとのまとめができた段階で、「発見したことを書きまとめる活動」と『『京ことば』をキャッチコピーで表現する活動』を行った。

〔発見したことを書きまとめる表現活動〕

枠内は、子どもたちが個々の発見を書きまとめた内容の一部である。

- ・ぼくはむかし話について調べました。この学習で、じめて知ったむかし話があります。「うそのたね本」「かえるをのみこんだととさん」などは知りませんでした。知らないむかし話は、まだあると思うので、読んでいきたいです。
- ・わたしは、このペンきょうをはじめてとき、おばあちゃんに「お金はどういう京ことばでしょうか」と聞いてから「『ぜぜ』だよ」と言うと、おばあちゃんが「お金のことをぜにということがあるからかもね」と教えてくれました。1年生に発表するとき、京ことばをよく知ってもらいたいです。

子どもたちが「京都にゆかりのある昔話」「京ことば」に対して新たな気づきをしたことがわかる。更に、学習したことを伝えあげようという意欲をもっていることを推測することができる。

〔「京ことば」をキャッチコピーで表現する活動〕

子どもたちが「京ことば」に対してどのようなおもいをもっているのかをキャッチコピーで表現する活動を行った。そのときのワークシート(図3-18)と、子どもたちが表現したキャッチコピーの一部を枠内に示す。

京都や地域で伝え続けたい昔話や京ことば	
名前()	
「京ことば」は「1200年の歴史をもつ、これぞ日本のことば」	
もっといいキャッチコピーはありませんか？	
このキャッチコピーにした理由……	

図3-18 「京ことば」をキャッチコピーで表現するワークシート

- ・京ことばはみぢかな歴史
理由→京ことばは、長い歴史で京都の人がみぢかなところであっているからです。
- ・京都のほこりの言葉、京ことば
理由→京都で生まれたから。
- ・京ことばは自分の町のことば、これぞ日本のすばらしさ
理由→自分の町のすばらしさを表現しているから。

そして、子どもたちのキャッチコピーの「むかしから」「れきし」という言葉を取り上げて、1cmを5年として240cmの等尺年表を提示した。すると、子どもたちが、およそ1200年という時間的な長さを認識することができるようになった。

次に、授業時間外で発展的に、「大人の人は、『京ことば』をどのようなキャッチコピーで表現するのかをインタビューしてみよう」と子どもたちに声をかけた。枠内は、子どもたちが集めたキャッチコピーの一部である。

- ・京ことばではんなり歴史散歩
理由→京ことばはやさしく華やかな京都の歴史を知ることができるから。
- ・京ことば使うぼくは京都人
理由→京ことばを使えるということは京都の歴史を受け継いでいることだから。
- ・歴史とおもてなし文化をはこぶ京ことば
理由→他府県や外国人に伝わったらいいなあと思ったから。
- ・今までもこれからも歴史をつくる京ことば
理由→これからも長く長く使われていくだろうから。
- ・訪れた人には京都の文化 わたしたちには「ほっこり」京ことば
理由→あたりまえに使っている京ことばは、京都に来た人が聞いたら「京都の文化だなあ」と思うけれど、わたしたちが聞けばとても「ほっこり」するから。

このように、子どもたち自身が表現したキャッチコピーや身近な大人の人のキャッチコピーから、子どもたちは「京ことば」が京都で生まれたものであること、昔から続いているものであること、京都に住んでいる人にとって身近な言葉であることを実感できたと推測できる。

<発信の場面>

◇他学年に発信、他校種に発信

他学年に発信する場面では、校内の1年生の子どもたちに向けて発信した。1年生は、国語科の学習で我が国の昔話を学習する。3年生が「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」を発信することで、昔話に対する1年生の理解の深まりも期待できるのではないかと考えた。

更に、他校種に発信する場面として、校区内にあるK中学校へ発信する機会を得ることもできた。

まず、図3-19は、校内の第1学年に向けて発信しているときの様子である。



図3-19 地図やポスター形式で発信している様子

図3-19の左は、昔話のゆかりの場所を地図上に表したグループの発信の様子である。一方、右は「たのしく京ことばをおぼえよう」というテーマで、京ことばでの話し合いを4コマまんがで表現したり、京ことばの意味を選択問題にしたりしたグループの発信の様子である。1年生の子どもたちからの感想を枠内に示す。

- ・きょうことばのぐるぐるは つむじのことだとわかりました。うらしまたろうが きょうとのむかしばなしだとわかりました。
- ・3ねんせいから きょうことばやむかしばなしのことをおしえてもらってうれしい。おおきにもいえたからすごくうれしかった。
- ・きょうとのむかしばなしがとてもおもしろかった。はやく3ねんせいになって うまくはっぴょうできるようになりたいです。おおきに。

次に、図3-20は、K中学校内の廊下に掲示する形で発信したときの様子である。

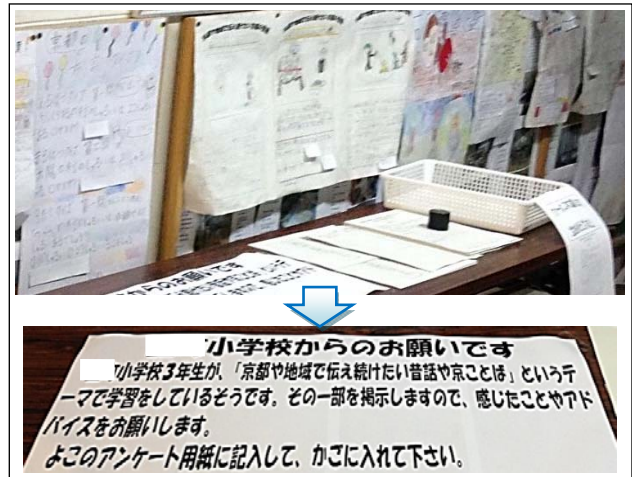


図3-20 K中学校内の廊下に掲示する形で発信したときの様子

K中学校の生徒からの感想やアドバイスには枠内のようなものがあった。

感想

- ・けっこう思ったより知らない言葉（京ことば）ばかりだったので、よかったです。
- ・したきりすずめが京都の昔話だとは知りませんでした。
- ・京都は日本でも「行ってみたい」ところのNo.1だそうです。

アドバイス

- ・「ほっこりする」とか「はんなり」は、全国的にも有名になってきていますね。私は「～おくれやす」が好きです。声に出してちょっと言ってみてください。自分も相手も心がやさしくなるといいと思いませんか。
- ・京都の方言は、とてもユニークでおもしろくて、やっぱり京都はよいなと思った。
- ・お茶漬け…「ぶぶづけ」というそうです。
- ・「～へん」などがあります。京都らしさがあつてとってもいいよ。
- ・京都は、1000年の都と呼ばれるくらいすばらしいところです。そして、歴史もたくさんあるので、昔話や出来事など、もっと調べるとこれから学んでいくことと結び付けられて、とてもいいかと思います。

<振り返り・再発見の場面>

1年生や中学生からの感想やアドバイスを受けた子どもたちの振り返りを枠内に示す。

- ・ぼくは、1年生や中学生の先ばいからのメッセージがとてもうれしいです。なぜかという、1年生に「ぐるぐる」という京ことばを知ってもらえたからです。ぼくも「ぶぶづけ」という京ことばが、お茶づけだと知りませんでした。でも、中学生に教わったから、ぼくもわかりました。(H児)
- ・ぼくは、中学生からの感想・アドバイスを読んで、「しみてる」を京ことばでは「しゅんでる」ということがわかりました。ほかにもわかったことがあります。それは「お茶づけ」を「ぶぶづけ」ということです。そして、京都は、1000年の都とよばれているということもわかりました。先ばいも京都のいろいろなことを知っているのだなと思いました。
- ・(略) 1年生と中学生に、わたしたちが学習したことにきょうみをもってもらえてよかったです。わたしも知らない京ことばや昔話があったので、調べたり新聞やポスターを作ったりしてよかったです。これからも京ことばや昔話を学習したことをいかしてがんばれたらいいなあと思います。本当に1年生や中学生につたわってよかったです。

特に、H児の書きまとめから、「H児は、学習時に『ぐるぐる』という京ことばが『つむじ』であることを発見した」⇒「校内の1年生や中学生に発信し、それに対する反応を受けた」⇒「お茶づけを意味する『ぶぶづけ』という京ことばがあることを再発見した」という学びの過程を推測することができる。

このように、子どもたちが「京ことば」や「京都にゆかりのある昔話」について学習したことを、1年生や中学生に発信し、振り返ったことで、発信者である子どもたちが「京ことば」や「京都にゆかりのある昔話」に対する理解や考えを深めること(再発見)につながった。更に、子どもたちは、学習したことが聴き手や読み手に伝わったという成就感を味わえたことから、学習したことを他学年に発信する学習は、効果的であったといえる。

第2節 A小学校第6学年の取組

(1)未来に伝えていきたい「京都や地域の魅力」についての学習の全体構想

A小学校では、研究協力員の先生と相談した上で、全18時間設定で単元「京都や地域の魅力を『未来へ』」に取り組んだ。

本単元の目標は「未来に伝えていきたい『京都や地域の魅力』について学んだことを、他校と互いに発信・交流することを通して、京都や地域の『伝統と文化』に対する理解を深める」である。また、本単元の評価規準については次のように設定した。

【関心・意欲・態度】

- 「京都の歴史」「世界文化遺産」などについて関心をもち、自ら追究していく課題を決定している。
- 「京都の歴史」「世界文化遺産」などについて学んだことから、京都や地域の一員としての自覚をもつとともに、京都や地域の「伝統と文化」を大切にしようとしている。

【思考・判断・表現】

- 「京都の歴史」「世界文化遺産」などについて体感したこと(みたり、きいたり、読んだり、触れたり、感じたり、親しんだりしたこと)をわかりやすく表現している。

【技能】

- 「京都の歴史」「世界文化遺産」などについて、実物(複製)や年表、図書資料を活用したり、聞き取り調査をしたりして、必要な情報を集めている。

【知識・理解】

- これまで見過ごしてきた京都や地域の中にも、「京都の歴史」「世界文化遺産」などといった京都や地域の魅力として誇れるものがあることを理解している。

また、本単元(全18時間)の主な学習活動は表3-2のとおりである。

表3-2 「京都や地域の魅力を『未来へ』」の主な学習活動(全18時間)

過程	時	学習活動
発見	1	○「学習に活用できる『平安京創生館』」を見て、「古典の日記念 京都市平安京創生館」を見学したときのことを振り返る。
		○国宝「洛中洛外図屏風(上杉本)」の写真資料を観察し、その中から、京都の伝統として、今後大切にしていきたいものを選ぶ。
発信・交流	2~4	○京都の魅力について考え、交流する。
		○京都の魅力について考え、交流したことを受けて、「京都で伝統としてつながっているもの、また2020年に『京都や地域の魅力』を探して、追究していこう」という新たなめあてを設定する。
再発見	5~15	○未来に伝えていきたい「京都や地域の魅力」を追究し、それを整理・分析して、まとめる。
発信・交流	16・17	○他校とともに京都市生涯学習総合センター(京都アスニー)に集い、『未来へ』残していきたい『京都や地域の魅力』を互いに発信・交流する。
		○他校と発信・交流し、学んだことを振り返る。
振り返り・再発見	18	※京都では、歴史だけではなく、伝統産業、年中行事など、数多くの脈々と受け継がれ、それらが現代、そして未来へとつながっていることを再発見する。

A小学校では、社会科の学習で、平安時代や室町時代など、「京都に関わりのある歴史」について学んでいることから、「京都の歴史」を学習素材として、更に、「自分たちを取り巻く『京都や地域の環境』」を学習素材として、総合的な学習の時間に位置付けて実践した。

「伝統と文化」と「環境」を関連付けながら実践する理由は次ページ枠内の二つである。

- ・A小学校は、「環境教育」の取組の中で「自然・生命」「エネルギー・地球温暖化」「ごみ・資源」をテーマにした実践を積み重ねてきていること。
- ・環境教育指導資料[小学校編]の「各教科，道徳，特別活動及び総合的な学習の時間における環境教育の指導」の「地域や我が国の伝統や文化の継承という視点を大切にする」には、「自然豊かな我が国において，先人たちは地域や我が国の豊かな気候，風土に根ざした独自の伝統や文化をはぐくんできた。そこには，自然と共生する知恵など環境教育の視点から学ぶべき数多くの価値を見いだすことができる。それら先人の知恵を積極的に取り上げ，地域や我が国の伝統や文化を受け継ぐという視点を大切にする学習を展開する。その際，地域の史跡や文化財，博物館や郷土資料館などの活用を図るように留意する。」(11)と明記されているため。
(下線は筆者によるもの)

上記の理由から，学校の取組や実態に応じて「伝統と文化」に関する教育活動を実践することが大切であり，実践を通して，子どもたちが「伝統と文化」の視点も「環境」の一つであることに気付いたり，理解したりすることが期待できると考えた。

更に，未来に伝えていきたい『京都や地域の魅力』について学んだことを，他校と互いに発信・交流することを取り入れた理由は，枠内のとおりである。

- ・子どもたちが京都や地域の「伝統と文化」に対する理解や考えを深めるため
- ・小・小連携の具現化を図るため

他校と互いに発信・交流したときの子どもたちの姿については次項で，小・小連携の具現化を図ることができたのかについては第4章で述べる。

(2) 手だてと子どもたちの姿から

ここでは，総合的な学習の時間「京都や地域の魅力を『未来へ』」での手だてと子どもたちの姿について述べる。

<発見の場面>

◇「環境学習」と「伝統と文化」をつなぐ

子どもたちは総合的な学習の時間で「環境」についての学習を進めてきている。更に，社会科の学習で創生館の見学学習を行っていた。

「みなさんは，総合的な学習の時間で環境についての学習をしていますか，これは，A小学校の

伝統だと思います。では、『環境学習』とえば，どのようなことを思い出しますか」という発問から学習を始めた。子どもたちからは「自然」「エコ技術」「くらし」などの反応が返ってきた。そこで，子どもたちが現代の京都の様子と過去の京都の様子を「時間軸」を意識しながら比較することができるように，社会科の学習で見学していた創生館の「平安京創生館『探検マップ』」に載っている「国宝「洛中洛外図屏風（上杉本）」を提示し，学習を進めた。

図3-21は，子どもが資料「国宝『洛中洛外図屏風（上杉本）』（以下，上杉本）」を観察している様子である。このとき，資料を観察する視点として子どもに指示したことは，京都の伝統として大切にしていきたいと思うものを選ぶことである。



図3-21 資料を観察している様子



図3-22 解説から情報を読み取る様子

子どもたちからは「清水寺にしようかな」「雪景色の金閣もいいな」「嵐山もあるね」といった声が聞かれた。また，上杉本だけでは情報の読み取りが難しいと考え，上杉本の解説を配布すると，図3-22のように，子どもたちが解説から情報を読み取る様子や上杉本と解説を照らし合わせながら，情報を読み取ろうとしている様子を見ることができた。京都の伝統として大切にしていきたいと思うものを選ぶときに「名前は知っているけれど，詳しくは知らないから」という声も聞くことができた。

これらの声から，京都の「伝統と文化」について，「知っていそうで知らない」という子どもたちの実態が明らかになった。それを学びの基盤として，本実践では，「京都や地域の魅力」を再発見することをねらう。

◇一人一人の考えをつなぎ、追究意欲を高める

子どもたち一人一人が京都の伝統として大切にしていきたいと思うものは様々である。それを交流するためには、上杉本の資料のどこに何が描かれていたのかを共通理解しておく必要があると考え、図3-23のように、交流の場面を設けた。



図3-23 交流時の様子

交流では、自分の考えを確かなものにしたたり、他者の意見を受け入れて新たな視点をもったりすることが大切である。このことから、交流を通して、京都の伝統として、今後も大切にしていきたいものが変わっても良いことを子どもたちに伝えた。交流後、子どもたちが書き表したカードの中には下の図3-24のようなものがあった。図3-24は、交流後にD児が書き表したカードである。

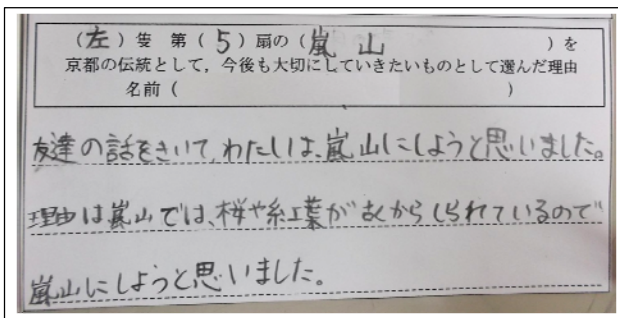


図3-24 交流後にD児が書き表したカード

D児は、第1時の学習で、京都の伝統として大切にしていきたいものを決めることができず、時間外の支援を必要としていた。しかし、D児が、図3-24のように、友だちの話を聞いて、自分の思いをカードに記述することができたことから、「個々の考えをつなぎ、追究意欲を高める」といった意図的な交流は有効であったといえる。更に、交流を通して、他の事象についても学習していこうとするD児の姿は、他校と互いに発信・交流する場面につながることを期待できるものであった。

一人一人の考えをつなぎ、追究意欲を高めたことから、「京都で伝統としてつながっているもの、また、2020年の東京オリンピックをきっかけに世界へ発信していきたい『京都や地域の魅力』を探して、追究していこう」という単元を通しての学習のめあてを設定した。

なお、右上の図3-25は、子どもたちのカードに指導者の見取りを付箋に朱書きし、上杉本に対応するように掲示したときの様子である。

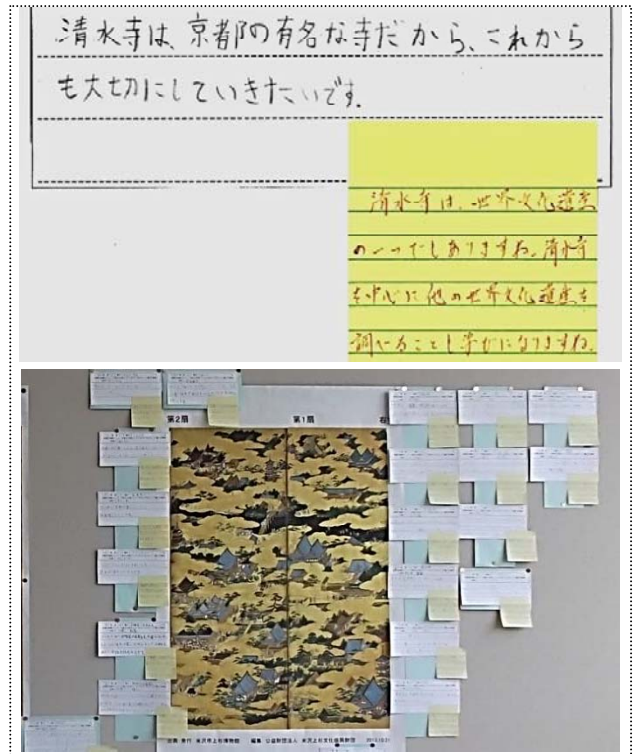


図3-25 指導者の見取りを付箋に朱書きし、掲示している様子

これは、子どもたちの追究意欲が持続するように意図したものである。常設掲示しておくことで、友だちのカードや付箋には、どのようなことが書かれているのだろうと関心を示す子どもたちの姿も見られた。この姿は、他者の学びから新たな気づきをしたり、理解を深めたりすることにもつながると考える。

◇「京都や地域の魅力」を追究する

ここでは、第4時までの学びを振り返ったり、複数の資料を読んだりしながら、追究テーマを考える時間とした。図3-26は、そのときの子どもたちの様子である。

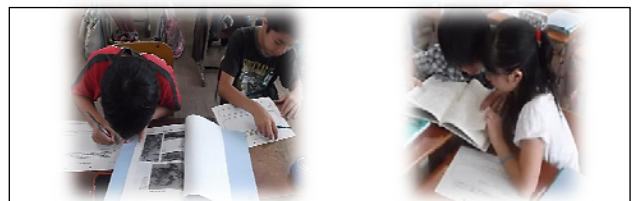


図3-26 追究テーマを考えている子どもたちの様子

子どもたちが選んだ追究テーマは枠内のおりである。

五山の送り火、京都三大祭り、天龍寺、清水寺、東寺、金閣、北野天満宮、平安京、京都の食べ物（京菓子・京野菜）、京ことば、嵐山・渡月橋、鴨川、伝統的な遊び、平安時代・江戸時代・現代の文化の移り変わり、祇園の町並み・舞妓さん・芸妓さん、京都に関する絵、京友禅・京焼等の伝統工芸品、御所

A小学校では夏休みに個人追究の課題が出されている。例年、子どもたちは理科的な内容を追究

している。今年度の6年生は、「伝統と文化」に関する内容を追究してもよいことになった。その取組では、子どもたち自らが創生館や東寺、市立図書館などに行って情報を集めたり、夏休み中にA小学校で行われた相談会（全3回）で研究協力員の先生や筆者が子どもたちに助言をしたりして、一人一人が追究し、まとめることができるようにした。そして、ここでの「追究⇒まとめ」という学習経験を夏休み明けの本単元の学習に生かしていくことにした。

夏休み明けに、子どもたちが決めた小グループで追究していくテーマは枠内のおりである。

京都の歴史③、古都京都の文化財17社寺・城③、平安京①、京野菜・京菓子②、京都の伝統産業①、京都三大祭①、五山の送り火① 【丸数字は、テーマごとのグループ数を示す】

上記のテーマをもとに小グループ（全12グループ）を編成し、グループ内で『未来へ』残していきたい『京都や地域の魅力』を追究していくという過程で学習を進めた。

ここでは、「京都を過去から現在の『時間軸』でとらえた事例」と「地図を活用して平安京の位置を確かめた事例」を挙げる。

上杉本との出会いから、京都を過去から現在という「時間軸」でとらえて追究したグループがあった。このグループでは、円町の景観や鴨川の移り変わりを地図上に表すことを通して、「円町の様子」が、時間の流れとともに変わってきていることがわかった。「京都に都が置かれていたころと変わらず、現代も京都に住む人は鴨川と“その時”を過ごしている。だから、鴨川という自然環境も大切にしていきたい」とまとめることができていた。このことは、本研究とA小学校の「環境教育」の取組が子どもたちの思考の中で関連付けられた結果、表出されたものだととらえることができる。



図3-27 地図上に平安京の位置を示したまとめ

図3-27は、現代の京都市のどこに平安京があったのかを地図上で表したものである。図3-27のように、平安京について追究したグループの子どもたちは、地図を活用して平安京の位置に着目することで、「自分た

ちの学校は平安京の中にある」とまとめることができていた。これは、社会科の学習で、創生館を見学していたことが、本単元での子どもたちの学びにつながった事例だといえる。

◇他校と互いに発信・交流する前に、個の学びを振り返る

ここでは、他のグループが作成したまとめを見たり、発信内容を聴いたりした。枠内は、「これまでの学習で、あなたが発見した『京都や地域の魅力』は何ですか」の問いに対する子どもたちの書きまとめ例である。

- ・私は、京都は自分の住んでいる地域なので、身近であり深く考えませんでした。しかし、この学習で、京都には古くから都が置かれ、多くの伝統や文化があることを知り、大切にしていきたいと思うようになりました。
- ・西陣織や京友禅は、一時中断されていたときもあったけれど、今まで続いてきました。また、平安時代の貴族の着物や京都三大祭、五山の送り火なども、今まで受け継がれてきている。僕は、このよう昔から続いてきているものは、ほとんど人の力でやってきたことに気付きました。
- ・これまでの学習を振り返ると、京都の歴史について知らなかったことがわかった楽しいし、おもしろいと思いました。たくさんわかっておもしろいところが、ぼくにとっての「京都や地域の魅力」だと思いました。
- ・現存する様々な建物に歴史があり、いろいろな人々が関わっていることを知りました。京料理や祭も有名で、昔の人々が、私たちに残してくれていることを知って、私もこれから京都の魅力を人に伝えたいと思います。

これらの記述から、本単元での学習を通して、子どもたちが、京都を身近に意識するようになったこと、京都の『伝統と文化』は、人によって昔から今まで伝えられていることに気付いたこと、「現存する様々な建物に歴史があり」という表現で、過去と現在のつながりを実感していることがわかる。更に、これまでの学習を通して、気付いたり理解したりしたことが自分自身にとっての「京都や地域の魅力」だととらえていることもわかる。そして、これまでの学びで“発見”したことを他者に伝えたいという意欲の高まりを見取ることができる。

<発信・交流の場面>

◇2校で互いに発信・交流

ここでは、『伝統と文化』の学びを発信・交流する会を設定し、A小学校第6学年の子どもたちと昨年度の研究協力校であるS小学校第6学年の子どもたちが、京都アスニーの研修室に集い、「伝統と文化」について学習し、まとめたことを互いに発信・交流した。

発信・交流の場面の条件とめあては枠内のとおりである。

条件

- ・社会科の学習で創生館での見学学習を経験していること
- ・京都の「伝統と文化」についての学習を進めてきていること
- ・2校が創生館に近いこと

めあて

- ・みんなが考えている「『未来へ』残していきたい『京都や地域の魅力』」とは何だろう。みんなの考えを発信したり、交流したりしよう。そして、発信・交流を通して、再発見したことを振り返ろう。

京都の「伝統と文化」について、A小学校の子どもたちが追究してきたテーマ、そして、S小学校の子どもたちが追究してきたテーマは枠内のとおりである。

A小学校【全12グループ】
 京都の歴史③、古都京都の文化財17社寺・城③、平安京①、京野菜・京菓子②、京都の伝統産業①、京都三大祭①、五山の送り火① 【丸数字は、テーマごとのグループ数を示す】

S小学校【全7グループ】
 国宝二条城二の丸御殿、平安京が残る街歴史都市京都、祭、京都の宝を守り伝える博物館、京都の歴史が魅力、心安らぐ茶道、わたしたちの知らない伝統産業

上の枠内からもわかるように、2校の子どもたちが追究したテーマには、京都の歴史、平安京などのように似たところがあれば、京野菜・京菓子、茶道、博物館のように違うところもあった。

図3-28は、発信・交流の場面での子どもたちの様子である。



図3-28 発信・交流の場面の子どもの様子

この場面では、各小学校での小グループをあらかじめA班とB班の2つに分け、A班の子どもたちが発表するとき、B班の子どもたちは発表を聴きにまわり、B班の子どもたちが発表するとき、A班の子どもたちは発表を聴きにまわることにした。また、A小学校の子どもたちはS小学校の子どもたちの発表を聴き、S小学校の子どもたちはA小学校の子どもたちの発表を聴くようにすることで、2校の子どもたちが、互いに発信する内容の共通点や相違点から、「伝統と文化」に対する理解や考えを深めることができたようにした。

右上の枠内は、発信・交流の場面における両校の子どもたちの発言や感想である。(A小学校の子どもたち：ゴシック体)

S小学校の発表から学んだこと

- ・同じテーマのところに聴きに行くと、僕たちの調べた内容と違ったので、さらに理解を深めることができました。僕たちは平安京について調べたけれど、都が京都に移された動機までS小学校の人は調べていてすごいと思いました。
- ・私たちは京都三大祭について調べてきました。S小学校の祭の発表を聴いて、自分の知らないこともあって、自分の知らなかったことやわからなかったことを調べていこうと思いました。
- ・S小学校の華道についての発表が心に残りました。茶道は、永い間続いている、国宝茶室の3つの内の2つが京都にあることを知りました。京都はすごく大切にされていて、文化や歴史が残ってきている場所なのだと思います。

A小学校の発表から学んだこと

- ・京都の魅力は主に平安時代から始まっていると思いました。着物の文化も平安からとA小学校の平安京グループから聞いたし、五山の送り火も、もとは平安からだと言われているし、平安時代についてもっと調べれば、京都の魅力をもっと知ることができると思いました。
- ・A小学校の京都三大祭の発表を聞いて、祇園祭が平安時代から行われているということを初めて知りました。私たちが祭のことについて調べていたけれど、まだまだわからないこともあったので、もっと深めていきたいと思いました。
- ・A小学校の三大祭についての発表を聴いて、再発見したことは、祇園祭のもとといわれる御霊会するとき、鉦が当時の都道府県の数あったということです。

2校で互いに発信・交流する場面を設定したことで、子どもたちは、改めて「京都や地域の魅力」を理解すること（再発見）ができた。同じテーマであっても、自分の知らないことがあったからこそ、もっと知りたいという意欲をもととする姿が見られたといえる。

感想交流の後、社会科の学習で見学していた創生館を、再度、見学することにした。図3-29は、子どもたちの様子である。



図3-29 創生館での子どもたちの様子

見学の際には、囲碁で遊んで「囲碁は平安時代にもあったものだと再発見した」と言ったり、上杉本の陶板画の前で足を止めて「洛中洛外図屏風（上杉本）を見て、金閣がどこにあるかわかりました」と金閣の位置を確かめたりする子どもたちの姿が見られた。更に、「平安京の復元模型を見て、都は四角形で角ばっていたことを確かめることが

できた」「平安京に住んでいた人々の衣食住など、生活の様子が改めてわかった」と学習したことを振り返る子どもたちの姿も見られた。

これらのことから、発信・交流の場面の直後に、再度、創生館を見学したことも、子どもたちの学びを点ではなく線としてつなぐ上で、効果的であったといえる。

枠内は、発信・交流の場面での様子を、両校がホームページに掲載した内容の抜粋（一部）である。

A小学校のホームページから

私たちの住んでいるA小学校の校区の一部は、平安宮の中にあります。そのような校区の特徴も「環境」と捉え、総合的な学習の時間で、身の回りの京都の伝統や文化・歴史について探究する学習をしてきました。今日は京都アスニーで、S小学校の6年生と学習の交流を行いました。似たテーマについて調べているグループの発表でも、まとめ方や視点の違いがあり、互いに新たな発見となりました。初対面の人への発表もいい経験となり、これからの学習にいかしていけそうです。

S小学校のホームページから

社会科・総合的な学習の時間の一環で進めています伝統文化学習、本日はA小学校6年生との合同学習を、京都アスニー会議室で行いました。

本校の子どもたちは、国宝二条城二の丸御殿・平安京が残る街歴史都市京都・祭・京都の宝を守り伝える博物館・京都の歴史が魅力・心安らぐ茶道・私たちの知らない伝統産業の7つのグループに分かれて交流を進めました。京都の魅力を再発見できた子どもたちです。本当に素晴らしいがんばりを見せてくれました。

(A小学校・S小学校の表記は、筆者によるもの)

記事の内容から、両校の子どもたちが互いに「『未来へ』残していきたい『京都や地域の魅力』」を発信・交流したことは、子どもたちが「伝統と文化」に対する理解を深める上で、効果的であったといえる。

<振り返り・再発見の場面>

本単元の学習を通して、自分自身の「京都」に対する興味・関心が変容したことをメタ認知しているY児（A小学校）がいた。Y児は、年末年始に北野天満宮に行くことが多いという生活経験から、北野天満宮について追究していた。枠内は、Y児が書きまとめた内容である。

最初、ぼくは、京都のことにはあまり興味がなかったけれど、夏休みのサマーチャレンジでは、北野天満宮のことを調べたり、学校ではグループで京都の歴史について詳しく調べたりして、自分が知らなかったことがたくさんわかり、面白かったので、京都のことに興味をもつようになりました。だから、このS小学校との発信・交流会だけではなく、中学校の自由研究などで、いまよりもっと深く調べてみたいと思います。

書きまとめた内容から、本単元での学習を通して、Y児は、北野天満宮が京都の歴史の関わるものであることを理解し、今後も京都の歴史について深めていきたいというおもいをもったと推測できる。

更に、「A小学校との発信・交流会を通して、あなたが再発見した『京都や地域の魅力』は何ですか」の問いに対するS小学校の子どもが書きまとめた例を枠内に示した。

A小学校との発信・交流によって、自分たちの調べたこととはまた違う考え方の発表を聞けたり、質問を合ったりすることで、新しい発見をしたり、さらに勉強を深めたりすることができました。

ぼくは平安宮についての学習を進めていたけれど、京都の魅力はほかにもたくさんあることを改めて実感しました。グループによってテーマは別だけれど、どのグループも結論は「守っていかないといけない」でした。はっきりとしたのは、これからの世代につなげるということです。自分たちの力で続けていくことは大切だと思います。そのために、これからも京都の歴史、文化にもっとふれていきたいです。

以上のことから、小学校同士が連携し、地域ぐるみで子どもたちを育み、中学校へとつなぐ上でも、2校で互いに発信・交流し⇒振り返り⇒再発見につなげる学習を構想し、実践することは有効であったと考える。

(10) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』2008.8 p.3

(11) 国立教育政策研究所教育課程研究センター『環境教育指導資料[小学校編]』2007.9 p.29

第4章 研究の成果と課題

－実践授業を通してみえてきたこと－

実践授業を通してみえてきたことを、枠内の三点にまとめた。

- ・実践授業前後のアンケート
- ・創生館での見学学習を発展させた子どもの姿
- ・つなぐ
 - 子どもたちの学びをつなぐ
 - 小・小をつなぐ
 - 小・小・施設をつなぐ
 - 小・中をつなぐ

<実践授業前後のアンケート>

本研究において、実践授業の前(6月)と後(12月)に子どもたちが「京都について」どのように思っているのかを把握するためのアンケートを行った。

◇M小学校第3学年

表4-1はM小学校第3学年40名を対象に行った実践授業前後のアンケート結果である。そこからみえてきたことについて成果と課題を述べる。

[成果]

表4-1 実践授業前後のアンケート

「京都について」アンケート【対象：M小学校第3学年1組40名】(%)				
実践授業前				
	思う	やや思う	あまり思わない	思わない
設問①	50	33	7	10
設問②	20	50	20	10
設問③	63	30	5	2
設問④	45	45	8	2
設問⑤	35	45	15	5

設問① 京都のことをくわしく知りたいですか。
 設問② 京都の行事に参加しようと思いますか。
 設問③ 京都が好きですか。
 設問④ 京都にあるものを守っていこうと思いますか。
 設問⑤ 京都で学んだことを校内や地域、保護者に伝えようと思いますか。

実践授業後				
	思う	やや思う	あまり思わない	思わない
設問①	50	33	10	7
設問②	35	35	20	10
設問③	78	17	5	0
設問④	60	30	7	3
設問⑤	58	30	10	2

設問① 京都のことをくわしく知りたいですか。
 設問② 京都の行事に参加しようと思いますか。
 設問③ 京都が好きですか。
 設問④ 京都にあるものを守っていこうと思いますか。
 設問⑤ 「京ことば」や「京都の昔話」について学んだことを校内の1年生や中学生に発信し、振り返ったことで、新たな学びや気付きはありましたか。

設問③「京都が好きですか」に対して、「思う」と回答した子どもたちが実践授業前は63%であったが、実践授業後は78%と15ポイント増えていることがわかる。「思う」と回答した理由について「京都生まれの京都育ちだから大好きです」「京都にはいろいろな歴史があるし、それを知ることによって京都をほこりに思えるから」「京都は1000年の都とよばれるぐらいすごいから」と書いている子どもたちがいた。これらのことから、子どもたちが、「京都にゆかりのある昔話」や「京ことば」の学習で理解したことをもとに、自分が京都に住んでいることを自覚したり、京都のよさを実感したりしていると推察する。

更に、実践授業後のアンケートの中に、枠内のような記述があった。

ロンドンの友だちに、むかしばなしを手紙で送ってあげました。

これは、設問⑤の記述欄に、N児が書いた文である。N児は、授業で聞いたり、読んだりした「京都にゆかりのある昔話」を面白いと感じ、外国に住む友だちに伝えたいとおもい、送ったというのである。

更に、N児は、「京都の昔話」を追究するグループの一員として学習を進めているときに「わたし



は『おさるのしりはなぜあかい』の面白さを1年生や中学生に知ってもらいたい」と話し、図4-1に示すポスターを作成して

図4-1 N児が作成したポスター

いた。
 N児の行動は、本市「学校教育の重点」の「京都で学ぶ強みを生かす子ども」に記載されている「本市の子どもが、京都・日本の伝統と文化の本質を感じとり、誇りを持って、国内外を問わず広く発信する力と態度を身に付けること(12)」につながるものだと考える。

[課題]

実践授業後のアンケートの設問⑤「『京ことば』や『京都の昔話』について学んだことを校内の1年生や中学生に発信し、振り返ったことで、新たな学びや気付きはありましたか」の問いについて、「あまり思わない」「思わない」と回答した子どもたちの割合が12%であった。

「思わない」と回答した子どもの中にT児がいた。T児は、実践前は、家庭学習で進んで「京ことば」を調べたり、小グループで「京都にゆかりのある昔話」について追究するときも昔話についての資料を集めたりするなど、意欲的に取り組む姿が見られた子どもである。しかし、実践授業後のアンケートで、T児は「もう知っているから、『思わない』」と回答している。それは、学習を通して、「もう知っている」と満足していることが理由ではないかと考える。

そこで、指導者側の指導・支援の視点から、「もうわかった」「もう知っている」などと満足している子どもたちが、学習中や学習後に追究意欲を持続することができるようにするためには、新たな教材の提示や問いかけが求められると考える。

◇A小学校第6学年

表4-2はA小学校第6学年46名を対象に行った実践授業前後のアンケート結果である。そこからみえてきたことについて成果と課題を述べる。

[成果]

表4-2 実践授業前後のアンケート

「京都について」アンケート【対象：A小学校第6学年46名】(%)				
実践授業前				
	思う	やや思う	あまり思わない	思わない
設問①	59	34	7	0
設問②	46	41	11	2
設問③	61	39	0	0
設問④	55	43	2	0
設問⑤	35	54	9	2
設問①	京都のことをくわしく知りたいですか。			
設問②	京都の行事に参加しようと思いますか。			
設問③	京都が好きですか。			
設問④	京都にあるものを守っていこうと思いますか。			
設問⑤	京都で学んだことを校内や地域、保護者に伝えようと思いますか。			
実践授業後				
	思う	やや思う	あまり思わない	思わない
設問①	74	26	0	0
設問②	57	37	6	0
設問③	85	15	0	0
設問④	76	22	2	0
設問⑤	61	24	13	2
設問①	京都のことをくわしく知りたいですか。			
設問②	京都の行事に参加しようと思いますか。			
設問③	京都が好きですか。			
設問④	京都にあるものを守っていこうと思いますか。			
設問⑤	京都について学んだことを他校の友だちと交流して、新たな学びや気付きはありましたか。			

設問③「京都が好きですか」に対して、「思う」と回答した子どもたちが実践授業前は61%であったが、実践授業後は85%と24ポイント増えていることがわかる。その理由を枠内のように書いた子どもたちがいた。

- ・京都だけの魅力があるから
- ・最近、嵐山に行ったけれど、観光客が多いので京都は自慢の場所だから
- ・京都には誇れるものがたくさんあるから
- ・京都は僕が生まれ、僕が育った場所だから
- ・京都にしかない伝統や文化がたくさんあるから
- ・京料理（はも、ゆば、京野菜など）が大好きなので、京都も大好きだから

これらのことから、子どもたちが、京都に根ざす「伝統と文化」について追究したことやS小学校と互いに発信・交流したことをもとに、京都に住んでいることを誇りに思ったり、京都の魅力を実感したりしていると推察する。

[課題]

実践授業後のアンケートの設問⑤「京都について学んだことを他校の友だちと交流して、新たな学びや気付きはありましたか」の問いについて、

「あまり思わない」「思わない」と回答した子どもたちの割合が15%であった。その中に「思わない」と回答したE児がいた。E児は、「京菓子・京野菜」を追究していた子どもでもある。E児のアンケートの記述欄を見ると、設問⑤だけが無回答であった。他の設問についてのE児の回答は表4-3のとおりである。

表4-3 実践授業後のE児のアンケート

「京都について」アンケート【対象：E児】				
実践授業後				
	思う	やや思う	あまり思わない	思わない
設問①	○	京都にある寺の名前をはじめ、いろいろなことを知りたいから		
設問②		○	京都の行事に参加すると京都のことをいろいろ知れるから	
設問③	○	京都にはいろいろな寺や食に関するところ、場所があるから		
設問④	○	京都のものは外国人にも人気だということがわかったから		
設問⑤				○
設問①	京都のことをくわしく知りたいですか。			
設問②	京都の行事に参加しようと思いますか。			
設問③	京都が好きですか。			
設問④	京都にあるものを守っていこうと思いますか。			
設問⑤	京都について学んだことを他校の友だちと交流して、新たな学びや気付きはありましたか。			

表4-3のとおり、E児が「京都にある寺の名前をはじめ、いろいろなことを知りたいから『京都のことをくわしく知りたい』『京都にはいろいろな寺や食に関するところ、場所があるから』『京都が好き』『京都のものは外国人にも人気だということがわかったから』『京都にあるものを守っていこうと思う』と、設問①③④について「思う」を選択していることから、この学習がE児の学びにつながっていなかったわけではないことがわかる。

設問⑤だけが無回答であった理由として考えられるのは、発信・交流の場面を立案したとき、A小学校とS小学校の追究テーマに違いがあった点である。

発信・交流する2校のテーマをできる限りそろえることで、「京野菜・京菓子」に対するE児の理解や考えを、更に深めることができたのではないかと考える。

<創生館での見学学習を発展させた子どもの姿>

京都アスニーにあった「源氏物語車争図屏風」について調べても良いですか。

これは、個人追究のテーマを考えていたときのI児の言葉である。I児は、京都にはどのような屏風絵があるのかを追究していこうとしていた。この言葉を聞いたとき、I児が「京都や地域の魅力を『未来へ』の学習で、京都にある屏風絵を追究していくことを通して、どのような理解や考え

をもつのだろうと興味を引かれた。以下は、I 児の学習の足跡である。

[個人追究（サマーチャレンジでの取組）]

図4-2は、I 児の追究課題「古の京の美しさ～源氏物語が伝える美しい京の文化～」の表紙である。

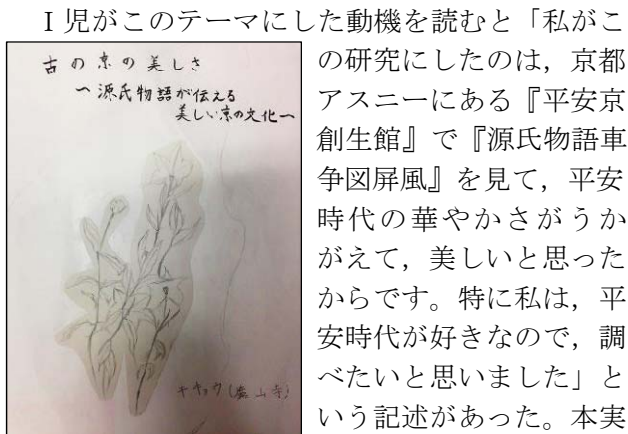


図4-2 I 児の追究課題の表紙

I 児がこのテーマにした動機を読むと「私がこの研究にしたのは、京都アスニーにある『平安京創生館』で『源氏物語車争図屏風』を見て、平安時代の華やかさがうかがえて、美しいと思ったからです。特に私は、平安時代が好きなので、調べたいと思いました」という記述があった。本実践での導入では、上杉本を提示していたことで、I 児が創生館での見学学習を想起し、更に、屏風絵に対する興味・関心を高めるきっかけになったと考える。

[小グループでの追究]

I 児は、小グループで追究していく際にも、「京都の歴史」グループの一員として「平安時代、江戸時代、現代の絵と人々の考えは、どのように変わったのだろうか」という問題意識をもち、調べたことを模造紙にまとめていた。図4-3は、I 児のグループがまとめた模造紙の一部である。

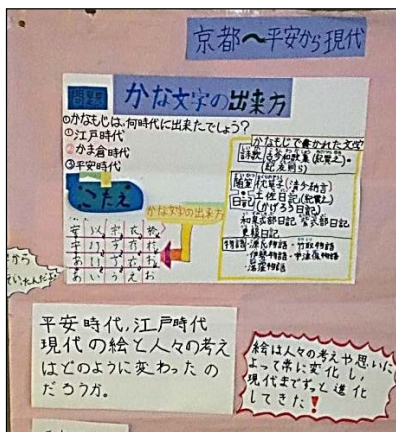


図4-3 I 児のグループがまとめた模造紙の一部

I 児のグループが源氏物語について追究していくことを通して、過去と現代のつながりをとらえることができていたといえる。

[発見の場面]

枠内は、「これまでの学習で、あなたが発見した『京都や地域の魅力』は何ですか」の問いに対する、I 児の書きまとめである。

・京都に多くの歴史、文学、芸術、景色など、こんなにたくさんの「美」が集結するのは、なかなかないものだと思います。これから、どう生きるかを考えさせてくれる歴史、様々な感情があふれる文学、心を落ち着かせ、ときに楽しませる芸術、四季折々の姿を見せる景色、そんな美しい京都の「宝」「心」を大切にしていきたいです。

枠内の記述から、本単元での学習を通して、I 児が「美」という表現で、京都のよさをとらえていることがわかる。

[発信・交流の場面、振り返りの場面]

枠内は、発信・交流の場面でのI 児の感想である。

・S 小学校の京都の宝を守り伝える博物館の発表を聴いて、全国の文化財の20%を京都が占めていることを知り、改めて、京都は歴史も深くていろいろなものが残っているすばらしい土地なのだと思います。

更に、振り返りの場面では、I 児が書きまとめたことは枠内のとおりである。

今回、S 小学校との発信・交流会で再発見し、特に心に残ったこと

- (1) 二条城には障壁画が3000枚もあり、部屋の役割ごとにテーマを合わせているということ。
- (2) 京都には日本の文化財の20%を占めていて、京都は毎年5000万人が観光に来ていて、世界1位だということ。

(1)に対して、私は、どの障壁画も美しく、特に私は、天皇が休む寝室の障壁画が落ちていて、よいと思いました。

(2)に対して、日本の文化財の20%が京都にあることにとってもおどろきました。しかも、5000万人もの人が京都に観光に来ていて聴いて、おどろきました。

社会科の学習で創生館を見学し、「源氏物語車争図屏風」に興味をもったI 児が、「京都や地域の魅力を『未来へ』の学習を通して、博物館の発表に関心をもち、二条城の障壁画や京都の文化財に対しての理解や考えを深めることができたことがわかる。

そして、A 小学校とS 小学校の2校の子どもたちが互いに京都に根ざす「伝統と文化」について発信・交流したことは、京都に根ざす「伝統と文化」に対して、他校の同学年の人がどのような見方や考え方をもっているのかに気付く機会にもなったと考える。

<つなぐ>

ここでは、「子どもたちの学びをつなぐ」「小・小をつなぐ」「小・小・施設をつなぐ」「小・中をつなぐ」について述べる。

[子どもたちの学びをつなぐ]

子どもたちの学びをつなぐ上で効果的であったことを枠内に三つ挙げる。

- ・第3学年の社会科の学習で使う京都市の地図
- ・創生館の「平安京創生館『探検マップ』」
- ・他学年に発信する学習活動

一つめが、第3学年の社会科の学習で使う京都市の地図（社会科副読本「わたしたちの京都3・4年上」）である。1年次の研究では、子どもたちが「学び方を学ぶ」ことや主体的に地域や京都の様子に目を向けようとしたり、興味・関心をもったりすることにつながると考え、京都市の地図を国語科で使っていた(13)。今年度は、京都市の地図を総合的な学習の時間に生かすことで、M小学校第3学年では「京都市内のどこにゆかりのある昔話なのか」、A小学校第6学年では「平安京は、現代の京都市内のどのあたりにあったのか」など、子どもたちの学びを点ではなく線でつなぐことができていた。

二つめが、創生館の「平安京創生館『探検マップ』」である。これを生かすことで、M小学校第3学年では、子どもたちが『枕草子』『源氏物語』は平安時代の都、つまり、現在の京都でつくられたものであること」に気付くことができた。A小学校第6学年では、子どもたちが社会科で創生館を見学していたことを想起したり、京都の歴史や平安京などについて追究したりするきっかけになった。

三つめが、他学年に発信する学習活動である。これは、M小学校第1学年の子どもの感想に「はやく3ねんせいになって うまくはっぴょうできるようにになりたいです」とあったことから、単年度だけではなく、次年度以降も続けることが可能な取組ではないかと考える。

[小・小をつなぐ]

第3章で述べたとおり、A小学校とS小学校の子どもたちが、京都アスニーに集い、「伝統と文化」について学習したことを互いに発信・交流したときの条件は、枠内のとおりである。

- ・社会科の学習で創生館での見学学習を経験していること
- ・京都の「伝統と文化」についての学習を進めてきていること
- ・2校が創生館に近いこと

条件の中に、「2校が創生館に近いこと」とあるが、実際、両校の位置関係もとても近い。そのため、小学校は違うけれど、通っていた保育園が一緒であったり、習い事が同じであったりという子どもたちもいた。

振り返り・再発見の場面で、A小学校のW児が枠内のような記述をしていた。

- ・A校が考えていたものに似ていたものもあれば、A校が考えていたものと違うものもあり、そのことから、京都やその地域などの特色があるとわかった。「京都や地域の魅力は伝統や文化、歴史が関係しているのだ」と考えることができた。このことが京都の魅力だと感じた。
(下線は筆者によるもの)

上の記述から、W児が地域ごとの特色に気付いていることがわかる。つまり、2校の子どもたちが京都アスニーに集い、「伝統と文化」について学習したことを互いに発信・交流することで、京都アスニー近隣の小学校と小学校、子どもたちと子どもたちだけではなく、地域と地域をつなぐきっかけになったといえる。

[小・小・施設をつなぐ]

『伝統と文化』の学びを発信・交流する会』を行うに当たって、筆者は、会場となる京都アスニーの担当者と日程を調整し、学習の進捗状況を確認して両校に伝えた。また、会の運営に関しては、発表時の話型例を提示したり、会場図やタイムテーブルを作成したりして、京都アスニーの職員及び両校の教職員が学習内容や当日の大まかな流れを把握することができるようにした。表4-4は、『伝統と文化』の学びを発信・交流する会』のタイムテーブルの一部である。

表4-4 「『伝統と文化』の学びを発信・交流する会』のタイムテーブルの一部

時間	主な流れ	子どもたち	参加校担任及び教職員
10:00	開会及び学習の進め方の確認	指定された席に座り、学習の進め方をきく。	児童観察
10:10	課題別グループのA班(ポスターセッション形式での発信・交流)	課題別グループA班は、指定された場所に移動し、学んできたことを発信する。また、課題別グループB班は、それぞれの発表をきく(ワークシートにメモする)。	児童の行動観察 気にかかる児童及びグループを支援する。
10:30	トイレ休憩	トイレ休憩	児童の行動観察
10:40	課題別グループのB班(ポスターセッション形式での発信・交流)	課題別グループB班は、指定された場所に移動し、学んできたことを発信する。また、課題別グループA班は、それぞれの発表をきく(ワークシートにメモする)。	児童の行動観察 気にかかる児童及びグループを支援する。
11:00	調整時間		
11:10	全体での感想交流	発信・交流を通して、再発見したことを付箋に書き、画用紙に貼る。	自校の子どもたちが書いた付箋を集める。
11:30	「古典の日記念 京都市平安京創生館」見学	荷物を持ち、「古典の日記念 京都市平安京創生館」を見学し、再度、気がついたことをワークシートに記録する。	誘導及び児童の行動観察
11:50	閉会・解散	安全に気を付けて学校に帰る。	帰校指導

この会を進めるためには、日程調整と運営などの準備を必要とする。しかし、小学校と小学校、施設をつなぎ学習を発信・交流する機会をもつことで、子どもたちの「伝統と文化」に対する理解や考えの高まりにつながると思う。

[小・中をつなぐ]

M小学校の実践では、3年生の子どもたちが学習したことを他校種に発信するという目的で、校区内にあるK中学校へ発信する場面をもつことができた。そして、子どもたちが、中学生や校内の1年生からの感想やアドバイスをもとに、「京都にゆかりのある昔話」「京ことば」について、振り返り・再発見する学習を行った。

この学習を実践した日は、小・中連携の取組から、K中学校の先生が小学生の学習の様子を参観する日であった。そのとき、中学生が茶道の茶器をつくったり、和菓子を創作したり、京ことば、京友禅・西陣織などについて学習し、まとめたことを子どもたちに紹介した。すると、中学校の先生から「中学校の取組を紹介してくださり、ありがとうございます。中学校と小学校をつないでくださいましたね」という感想を得た。

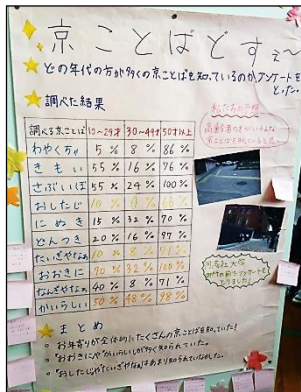


図4-4は、「伝統文化教育」の公開授業のときに中学生が発表していた京ことばのまとめである。中学生が学習している内容を小学生に伝えたり、小学校での取組を中学校に発信したりすることは、小学校と中学校をつなぐ「種まき」になると考える。

以上、実践授業を通してみてきたことを述べてきた。

京都は「伝統と文化」の学習素材が豊富である。例えば、祭がある。実際に、A小学校の子どもたちは、S小学校との発信・交流から「京都では、年間に数多くの祭が行われていること」を知り、とても驚いていた。1月に行われている祭だけでも、10を超える。地域の祭を教材化し、更に、京都の他地域の祭について追究していく学習が、実現可能なことも「京都や地域で学ぶ強み」だといえる。

右上の表4-5は、学習素材として考えられる「京都の『伝統と文化』」を、事例として筆者がまとめたものである。

本事例の詳細については、京都市総合教育センターホームページを参照されたい。

表4-5 学習素材として考えられる「京都の『伝統と文化』」(事例)

古都京都の文化財17社寺・城			
古典の日記念 京都市平安京創生館			
生活文化	言語	・京ことば ・昔話 ・短歌と俳句	
	衣と住	・着物 ・町屋	
	食	・京野菜 ・京菓子	
伝統芸能	・茶道 ・華道	・能 ・狂言	・歌舞伎 ・雅楽
伝統産業			
京都三大祭, 五山の送り火 地域の祭, 地域の行事			

このような学習素材を教材化することで、京都や地域再発見につながる「伝統と文化」に係る学習の実践の第一歩になること、更には、本研究で提案したような学習形態の工夫により、学習効果の高まりが期待できる。

(12) 前掲(2)p. 1

(13) 前掲(1)p. 200

おわりに

フランスに留学していた知人から「日本以外の国からフランスに来ていた仲間は、自分の国や自分が住んでいる国やまちのことを話題にできていた。しかし、私はなかなか話題にできなかった。京都について、知らないことが多い」という話を聞く機会があった。筆者は、改めて、京都の「伝統と文化」に対して理解する力が求められていることに気付かされた。

二年間、京都に根ざす「伝統と文化」の学習素材について考えたり、それを各教科等に位置付け、学習を構想したりすることを通して、筆者自身が、京都を「再発見」することができた。

今年度は、朱雀第四小学校と室町小学校の研究協力員の先生方、教職員の皆様、子どもたち、また、烏丸中学校、朱雀第六小学校の先生方、教職員の皆様、子どもたちに支えられ、更に、京都市生涯学習総合センターの職員の方々をはじめ、多くの方々にご助言をいただき、本研究を進めることができた。この場を借りて感謝の意を表するとともに、今後も、「京都や地域で学ぶ強みを生かす子どもの育成」につながる実践を追究していきたいと考えている。